

陸前高田市文化財調査報告 第37集

かわうち ふつかいち  
川内遺跡・二日市貝塚発掘調査報告書

平成27年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業  
に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査

2021

岩手県陸前高田市教育委員会

# 川内遺跡・二日市貝塚発掘調査報告書

平成 27 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業  
に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査

## 序

陸前高田市は、岩手県南部に位置し、県内では温暖な気候の地域にあり、山、川、そして三陸の海がもたらす豊かな自然の恩恵を享受し、縄文時代から現在にいたるまで発展してまいりました。白砂青松で知られる名勝高田松原、国指定史跡の中沢浜貝塚などの歴史文化遺産が多数存在しております。「周知の埋蔵文化財包蔵地」としましては、縄文時代の貝塚、墨書土器・刻書土器を出土する古代遺跡、そして中世に築城された城館跡などが市内に約270か所存在しており、長い歴史の営みを現在に伝えております。このような自然や歴史文化遺産を保存し後世に伝え活用していくことは、現在を生きる私たちの責務です。

一方、市勢発展や地域活性化に伴う各種開発等により消滅していく遺跡があることも事実です。このような各種開発等によって失われた遺跡を元に戻すことはできず、この遺跡が持つ我々の先人が生きた証は永久に失われてしまいます。

陸前高田市教育委員会では、開発事業や東日本大震災の様々な復興事業と貴重な遺跡の保護を両立するため、関係機関と事前の協議・調整を行いながら、やむを得ず消滅する遺跡については発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成27年度に東日本大震災による復興に係る個人住宅再建に伴い実施した、川内遺跡、二日市貝塚における発掘調査成果を収録したものです。本書が、地域の方々をはじめとした学術研究、教育活動に広く活用され、ひいては文化財保護思想の普及啓蒙に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

令和3年3月

陸前高田市教育委員会

教育長 大久保 裕明

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県陸前高田市米崎町字川内 93 番地 1 に所在する川内遺跡と、岩手県陸前高田市気仙町字二日市 6 番地に所在する二日市貝塚の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、平成 27 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業に伴う個人住宅建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導のもとに、陸前高田市教育委員会が実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡コード・遺跡略号は、川内遺跡が NF68-0095・KWU-15、二日市貝塚が NF77-0054・FIK-15 である。
- 4 各遺跡の野外調査及び室内整理期間、遺跡略号、調査担当者は次の通りである。

遺跡名	遺跡略号	区分	期間	面積	担当者
川内遺跡	KWU-15	野外調査	2016.01.13～2016.03.31	約 580㎡	遠藤勝博・新沼幸子
		室内整理	2018.01.04～2018.03.31	－	佐藤典邦
二日市貝塚	FIK-15	野外調査	2015.05.12～2015.06.30	約 100㎡	後藤 円・新沼幸子
		室内整理	2018.01.04～2018.03.31	－	佐藤典邦

- 5 本報告書の作成は、調査担当者の調査メモを元に（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが遺構原稿を作成し、全体の編集を行った。
- 6 業務委託は、以下の通りである。

項目	委託先	委託内容
1	(有) さくら設計	座標原点の測量
2	(株) タックエンジニアリング	空中写真測量
3	(株) ラング	縄文土器・石器・石製品の実測図化
4	花崗岩研究会	石器・石製品の石材同定
5	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	報告書の執筆・編集

- 7 本書では以下の地形図を使用した。  
『1/25,000 地形図 大船渡・陸前広田・今泉・鹿折』（国土地理院）  
『1/50,000 地形図 盛・気仙沼』（国土地理院）  
『1/2,500 災害復興計画基図（迅速図）2 版 X-NF68-1・X-NF77-1』（国土地理院）
- 8 野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関から御指導・ご助言・ご協力をいただいた。  
岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課
- 9 発掘調査資料は、全て陸前高田市教育委員会において保管している。
- 10 調査成果の一部については、現地説明会資料等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

## 凡 例

### 1 遺構図の用例は次の通りである。

#### (1) 遺構実測図の縮尺は下記の通りである。

竪穴住居跡の炉、柱穴状ピット（二日市分）、性格不明遺構（二日市分 SX 3、4、6） 1/30

竪穴住居跡、ピット（川内分）、性格不明遺構（二日市分 SX 5） 1/60

各図版にはスケール及び縮尺を付した。

#### (2) 遺構実測図及び本文で示した座標は、平面直角座標 X 系に基づいて表示している。

#### (3) 推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した（凡例図参照）。

#### (4) 遺構内の土器を P、石器・礫を S で示した。

#### (5) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。

#### (6) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

### 2 遺物実測図の用例は次の通りである。

#### (1) 遺物実測図の縮尺は、縄文土器 1/3、石器 2/3・1/3・1/5、土製品 2/3、石製品 2/3、陶磁器・金属製品・銭貨 2/3 で表した。

#### (2) スクリーントーンを使用して、石器の使用痕を表した（凡例図参照）。

### 3 写真図版の用例は次の通りである。


#### (1) 遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載したが、紙面の都合で断面のみにしたものもある。

#### (2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

#### 遺構使用トーン凡例

	焼土	K40%
	礫	K10%
	河川堆積	K60%

#### 遺物使用トーン凡例

	整形時の敲打痕	
	擦痕	K20%
	使用による敲打痕	K40%
	黒色付着物	K70%
	節理	

## 目 次

I	調査に至る経過	1
1	調査の経緯	1
2	調査体制	2
II	遺跡の立地と環境	3
1	遺跡の位置	3
2	地理的環境	3
3	歴史的環境	3
III	調査と整理の方法	7
1	野外調査の方法	7
2	整理の方法	7
IV	川内遺跡の調査	8
1	調査区の位置と基本層序	8
2	試掘調査	10
3	調査の経過	10
4	検出遺構	11
(1)	概 要	11
(2)	竪穴住居跡	13
(3)	土器埋設遺構	17
(4)	ピ ッ ト	18
5	出土遺物	21
(1)	土 器	21
(2)	石 器	22
(3)	土 製 品	23
(4)	石 製 品	23
V	二日市貝塚の調査	52
1	調査区の位置と沿革	52
2	基本層序	54
3	調査の経過	54
4	検出遺構	54

(1) 概要	54
(2) 柱穴列	54
(3) 土坑	56
(4) 柱穴状ピット	62
(5) 遺物包含層	64
(6) 性格不明遺構	64
(7) 倒木痕	64
5 出土遺物	65
(1) 土器	65
(2) 石器	66
(3) 土製品	66
(4) 石製品	72
(5) 陶磁器	72
(6) 金属製品	72
(7) 銭貨	73
VI 調査のまとめ	83
1 川内遺跡	83
2 二日市貝塚	83
報告書抄録	113

## 図版目次

凡例図	
第1図 遺跡位置図	1
第2図 周辺の遺跡分布図	5
川内遺跡	
第3図 遺跡範囲と周辺の地形図	9
第4図 調査全体図	12
第5図 竪穴住居跡1	14
第6図 竪穴住居跡2	15
第7図 竪穴住居跡3、11-01P、南Pピット	17
第8図 5-01P、7-01P、7-02P、17-01Pピット	18
第9図 土器(1)	24
第10図 土器(2)	25
第11図 土器(3)	26
第12図 土器(4)	27
第13図 土器(5)	28
第14図 土器(6)	29
第15図 土器(7)	30
第16図 土器(8)	31
第17図 石器(1)	32
第18図 石器(2)	33
第19図 石器(3)	34
第20図 石器(4)	35
第21図 石器(5)、土製品(1)	36
第22図 土製品(2)、石製品	37
二日市貝塚	
第23図 二日市館縄張図	52
第24図 遺跡範囲と周辺の地形図	53
第25図 調査全体図	55
第26図 調査区西壁、北壁断面	56
第27図 SP 1～8、14～16、39、50 柱穴状ピット	57
第28図 SP 9～13、17、18、20、23、24、37、38、43、46、51、64 柱穴状ピット	58
第29図 SP21、22、25～32、36、40、47、53、60 柱穴状ピット	59

第30図	SK 1 土坑、SP33～35、41、42、44、45、52、59、61 柱穴状ピット	60	第34図	土器（2）	68
第31図	SP48、49、54～58、62、63、65 柱穴状ピット	61	第35図	土器（3）、石器（1）	69
第32図	SX 3・4・6 性格不明遺構、SX 5 倒木痕	62	第36図	石器（2）	70
第33図	土器（1）	67	第37図	石器（3）	71
			第38図	土製品、石製品、陶磁器、金属製品、銭貨	72
			第39図	川内遺跡の遺構分布図	84

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡表	4	第7表	土器観察表	74
川内遺跡			第8表	石器観察表	81
第2表	土器観察表	38	第9表	土製品観察表	82
第3表	石器観察表	48	第10表	石製品観察表	82
第4表	土製品観察表	51	第11表	陶磁器観察表	82
第5表	石製品観察表	51	第12表	金属製品観察表	82
二日市貝塚			第13表	銭貨観察表	82
第6表	柱穴状ピット計測表	63			

## 写真図版目次

川内遺跡			二日市貝塚		
写真図版1	遺跡遠景	87	写真図版17	遺跡遠景、調査区全景	103
写真図版2	遺跡近景	88	写真図版18	柱穴列1、SP 1～6ピット	104
写真図版3	竪穴住居跡1～3（1）	89	写真図版19	SP 7、9・10、15、17、19、24、27ピット	105
写真図版4	竪穴住居跡1～3（2）、土坑（1）	90	写真図版20	SP28、30、34、39、41、44、52、54ピット	106
写真図版5	土坑（2）、土器埋設遺構（1）	91	写真図版21	SP56、58、59ピット、SK 1土坑、SX 1包含層	107
写真図版6	土器埋設遺構（2）、河川堆積状況、現況、調査風景	92	写真図版22	SX 2攪乱、SX 3～6性格不明遺構、調査区西壁・北壁断面	108
写真図版7	土器（1）	93	写真図版23	土器（1）	109
写真図版8	土器（2）	94	写真図版24	土器（2）	110
写真図版9	土器（3）	95	写真図版25	石器（1）	111
写真図版10	土器（4）	96	写真図版26	石器（2）、土製品、石製品、陶磁器、金属製品、銭貨	112
写真図版11	土器（5）	97			
写真図版12	土器（6）	98			
写真図版13	石器（1）	99			
写真図版14	石器（2）	100			
写真図版15	石器（3）、土製品（1）	101			
写真図版16	土製品（2）、石製品	102			



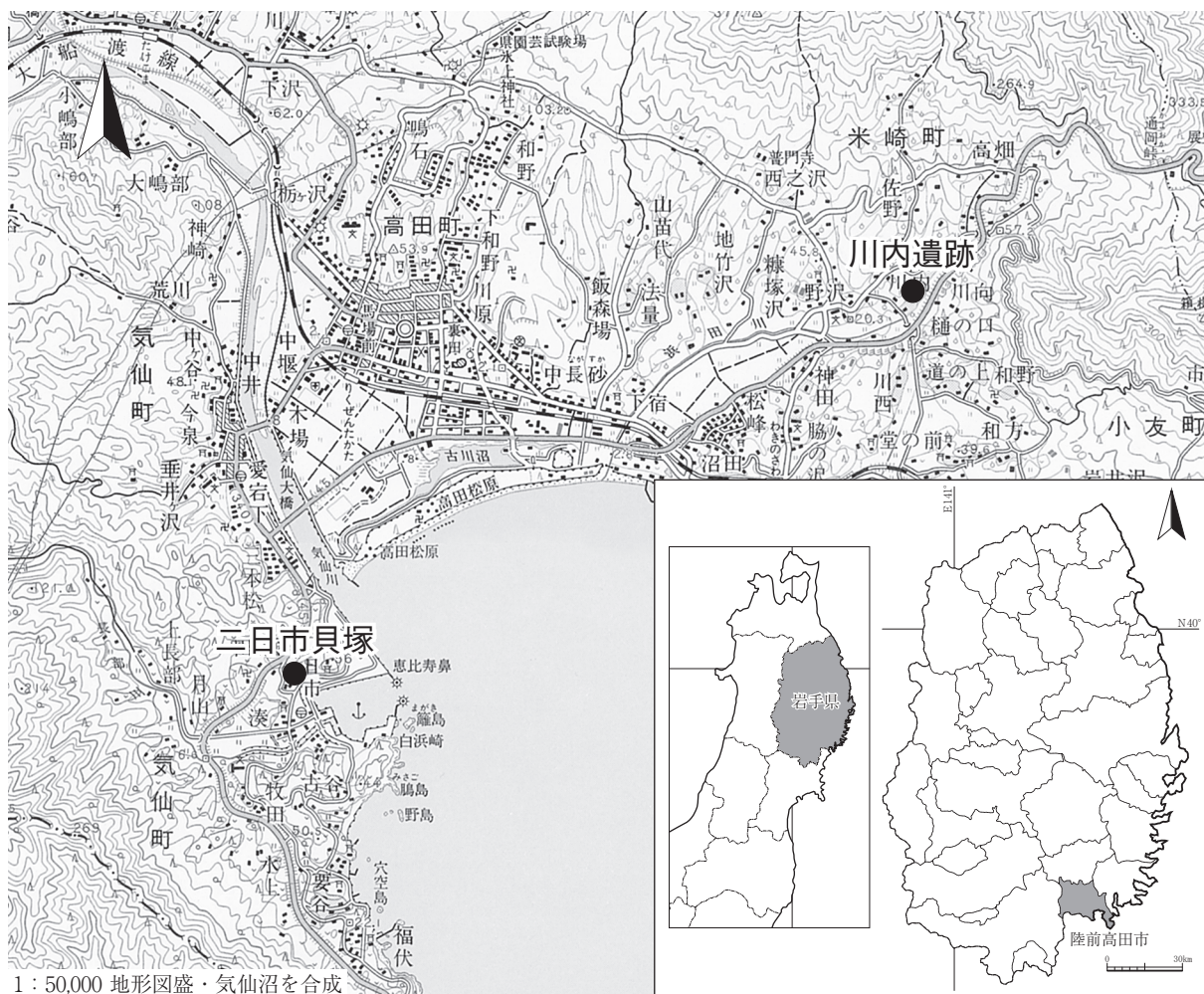
# I 調査に至る経過

## 1 調査の経緯

本書は、平成27年度に実施した川内遺跡・二日市貝塚の発掘調査報告書である。原因はいずれも個人の宅地造成及び住宅建築であった。

川内遺跡は、平成27年7月10日付けで陸前高田市米崎町字沼田14番地在住の菅原悟氏から、陸前高田市米崎町字川内93番地ほかの地所について宅地造成の届け出があった。陸前高田市教育委員会では、「事前の発掘調査が必要と思われる」との所見を記した現地調査書を添付して、平成27年7月17日付け、陸高教生第250号にて岩手県教育委員会宛てに進達した。これに対して、平成27年7月21日付け、教生第3-138号通知には「工事着手前に発掘調査を実施」との指示がなされた。陸前高田市教育委員会は平成27年12月3日から9日にかけて試掘調査を行い、遺構・遺物を確認したことから本調査の実施を決定し、翌平成28年1月13日から3月31日までの期間で本調査を行った。

二日市貝塚は、平成27年2月28日付けで陸前高田市気仙町字二日市6番地在住の熊谷和幸氏から、陸前高田市気仙町字二日市6番地の地所について宅地造成の届け出があった。陸前高田市教育委員会では、「事前の発掘調査が必要と思われる」との所見を記した現地調査書を添付して、平成27年3月12日付け、陸高教生第763号にて岩手県教育委員会宛てに進達した。これに対して、平成27年3月



第1図 遺跡位置図

## 2 調査体制

17日付け、教生第3-554号通知には「工事着手前に発掘調査を実施」との指示がなされた。陸前高田市教育委員会は平成27年4月30日から5月1日に試掘調査を行い、遺構・遺物を確認したことから本調査の実施を決定し、平成27年5月12日から6月30日までの期間で本調査を行った。

## 2 調査体制

平成27年度の川内遺跡・二日市貝塚の調査体制は、以下である。

調査主体	陸前高田市教育委員会	
総括	堺 伸也（教育次長兼生涯学習課長）	
事務局	高橋一成（同課課長補佐） 吉田志真（同課生涯学習係長） 瀧本正志（同課主査／福岡市派遣） 藤元剛史（同課主任／京都市派遣） 曳地隆元（同課学芸員） 村上紀子（同課文化財専門員）	
調査員	遠藤勝博（同課発掘調査員）	川内遺跡担当
	後藤 円（同課発掘調査員）	二日市貝塚担当
	新沼幸子（同課文化財専門員）	川内遺跡・二日市貝塚担当
作業員	梅木良子、佐藤キヨ子、佐藤美代子、荒木コギク、荒木美智代、高橋由美、 佐々木栄子、菅野由美子、及川恵美子、村上由美子、金野由紀夫、菅原とみ子、 大和田武喜、戸羽由美、村上奈穂子、及川亜紗美、菅野トシエ、菅野貴恵、 戸羽さおり、鈴木貞子、佐々木美佳、三嶋登喜子、佐々木道子、後藤美知香、 佐々木かおり、佐々木のり子、千田育子、圓谷百合、平野圭一	

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置

川内遺跡は岩手県陸前高田市米崎町字川内、二日市貝塚は岩手県陸前高田市気仙町字二日市に所在し、国土地理院発行 50,000 分の 1 地形図「盛」、「気仙沼」の図幅に含まれる。川内遺跡は北緯 39 度 01 分 04 秒、東経 141 度 40 分 06 秒、二日市貝塚は北緯 38 度 59 分 42 秒、東経 141 度 37 分 14 秒の経緯度付近に記載される。

第 1 図に遺跡の位置を示したが、陸前高田市は岩手県の南東端に位置し、東は大船渡市、北は住田町、西は一関市大東町、南には宮城県気仙沼市に接している。市域のほぼ中央を気仙川が南流しており、広田湾に注いでいる。今回報告する川内遺跡は気仙川の東方、二日市貝塚は西方にある。

川内遺跡は、陸前高田市役所から南東に約 3.9km、三陸自動車道通岡 I C から南西に約 1.1km の浜田川によって開析された右岸低位段丘にあり、また、二日市貝塚は、陸前高田市役所から南に 3.6km、三陸自動車道長部 I C から北東に約 1.2km の長部漁港から程近い海に向かって張り出した舌状の小丘陵上に立地している。

### 2 地理的環境

気仙川は、気仙郡住田町の高清水山付近の土倉峠を源とする全長 44km、流域面積 520km<sup>2</sup>を測る二級河川で、気仙川水系の本流である。気仙川水系には、中原川、川原川、小泉川、矢作川、生出川、雪沢川の支流が含まれており、これらの河川から合流した気仙川河口付近は右岸に丘陵が迫っているため、陸前高田市街地がある左岸側に氾濫を繰り返していたと考えられ、現在も沖積平野が広く発達している。また、浜田川や長部川は市域内に源流を持つ小河川で、川内遺跡は浜田川中流域の河岸段丘上に立地している。

一方、海岸線はリアス式海岸特有の岬と湾が交互に連続する複雑な地形となっており、広田半島は南東方向の太平洋に大きく突出し、西方には湾口部約 3.5km、湾奥まで約 7km の逆 U 字状の広田湾を形成している。

また、市域は北上山地南東部に位置しており、北の氷上山（874.4m）をはじめ、東の箱根山（446.8m）、広田半島の仁田山（254.1m）、大森山（147.2m）、西の笹長根山（519.9m）などの 800m 以下の低山やこれを超える山地に囲まれている。

### 3 歴史的環境

第 1 表及び第 2 図に周辺の遺跡を示した。岩手県遺跡台帳（令和元年度版）によると、陸前高田市には計 267 箇所の遺跡が登録されている。このうち、川内遺跡と二日市貝塚を含む計 63 箇所を図表で掲載した。

陸前高田市では、東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査が増加しており、近年における発掘調査成果の蓄積が進んでいる。

8 高田城跡は、土地区画整理事業高田西地区に関連して、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化

第1表 周辺の遺跡表

No	遺跡コード	遺跡名	種別	時代
1	NF68-0095	川内	集落跡	縄文・奈良・平安
2	NF77-0054	二日市貝塚	貝塚	縄文
3	NF77-0037	二日市館 (八幡館・鶴館)	城館跡	中世
4	NF77-0006	川口	散布地	縄文
5	NF77-1044	水上 I	散布地	
6	NF77-1066	双六塚	祭祀跡	
7	NF77-1089	要谷館	城館跡	近世
8	NF67-0172	八幡館 (高田城)	城館跡	中世
9	NF67-0089	西館	散布地	奈良・平安
10	NF67-0038	柳ヶ沢	貝塚	
11	NF67-0155	西和野	集落跡	縄文
12	NF67-0167	下和野	集落跡	
13	NF67-0147	貝畑	貝塚	縄文
14	NF67-0163	洞の沢	散布地	
15	NF67-0186	古泉館 (東館)	城館跡	中世
16	NF67-0262	太田	散布地	
17	NF67-0294	飯森場 (花館)	散布地・城館跡	中世
18	NF67-1216	小泉	集落跡	平安
19	NF57-2260	中和野 I	集落跡	
20	NF67-0200	中和野 II	散布地	縄文
21	NF67-0230	中和野 III	散布地	縄文
22	NF57-2186	西和野 I	散布地	奈良・平安
23	NF57-2189	西和野 II	散布地	縄文
24	NF57-2197	小森前	散布地	縄文
25	NF57-2182	鳴石	散布地	縄文
26	NF57-2241	瓜畑	散布地	縄文
27	NF57-2045	相川 I	集落跡	縄文・奈良・平安
28	NF57-2102	相川 II	散布地	縄文
29	NF57-2014	下沢 I	散布地	縄文
30	NF57-2006	下沢 II	散布地	縄文
31	NF67-0258	山苗代	散布地	
32	NF67-0239	豆の通	金吹跡	

No	遺跡コード	遺跡名	種別	時代
33	NF57-2392	大隅 I	散布地	
34	NF67-0301	大隅 II	散布地	縄文
35	NF67-0300	荒沢 I	散布地	
36	NF67-0312	荒沢 II	散布地	縄文
37	NF67-0335	地竹沢 I	散布地	縄文・奈良・平安
38	NF67-0382	地竹沢 II	散布地	奈良・平安
39	NF67-0328	野沢 I	散布地	縄文・奈良・平安
40	NF67-0359	野沢 II	散布地	縄文・奈良・平安
41	NF68-0060	野沢 III	散布地	奈良・平安
42	NF68-0080	野沢 IV	散布地	奈良・平安
43	NF67-0379	中山館	城館跡	中世
44	NF68-0015	佐野 I	散布地	縄文
45	NF68-0026	佐野 II	散布地	縄文・弥生
46	NF68-0045	佐野 III	散布地	縄文
47	NF68-0065	佐野 IV	散布地	奈良・平安
48	NF68-0075	佐野 V	散布地	奈良・平安
49	NF68-1007	川向	散布地	縄文
50	NF67-1328	川崎	散布地	
51	NF67-2305	松峰 I	散布地	奈良・平安
52	NF67-1366	松峰 II	散布地	
53	NF68-1040	神田	散布地	奈良・平安
54	NF68-1037	中障 (高木城・日高城)	城館跡	中世
55	NF68-1081	脇沢館 (鳥崎城)	城館跡	中世
56	NF68-1093	川西	散布地	縄文
57	NF68-1066	中島 II	散布地	
58	NF68-2050	米崎城 (浜田城)	城館跡	中世
59	NF67-2379	米ヶ崎	貝塚	弥生・縄文
60	NF78-1037	矢之浦 II	散布地	縄文
61	NF78-1067	瀬沢貝塚	貝塚	縄文
62	NF78-2005	瀬沢 II	散布地	縄文
63	NF78-1098	瀬沢 III	散布地	奈良・平安

財センターが平成 26・27 年の 2 ヶ年に亘って調査を行い、16 世紀後半までに廃絶した中世城館の作事や普請の痕跡が確認された。遺物は、16 世紀後半の中国産磁器のほか、中世の茶臼、近世の国産陶磁器、銭貨が出土した ((公財) 岩文埋 2018)。

17 飯森場遺跡 (花館) は、土地造成事業に関連して、(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成 24・25 年の 2 ヶ年に亘って調査を行い、15 世紀後葉～16 世紀前葉の中世城館に関連する遺構や 16 世紀中葉の鍛冶炉、弥生時代後期の住居状遺構が確認された。15・16 世紀の中国産磁器や国産陶器のほか、中世の茶臼、埴塼、近世陶磁器、弥生時代後期の土器も見つかっている ((公財) 岩文埋 2015)。

22 西和野 I 遺跡は、土地区画整理事業高台 IV に関連して、(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成 27 年に調査を行い、古代の方形周溝や土坑が確認された。9 世紀後半の土師器のほか、弥生時代後期の土器、後北 C<sub>2</sub>・D 式に比定される続縄文土器が出土した ((公財) 岩文埋 2017)。

58 米崎城は、防潮堤関連付帯道路工事に関連して、(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成 31 年に調査を行い、古墳時代の竪穴住居跡や縄文時代、近世の土坑、溝などが確認され



第2図 周辺の遺跡分布図

た。中世の米崎城に関わる遺構は検出されなかったが、15～16世紀代の瀬戸・美濃産の天目茶碗や永楽通寶が出土した（（公財）岩文埋 2020）。

61 瀬沢貝塚は、個人住宅の宅地造成に関連して、陸前高田市教育委員会が平成 25 年度に調査を行い、遺物包含層から縄文時代後期中葉や晩期末葉の土器や石器を出土した（陸前高田市教委 2018）。

また、27 相川 I 遺跡は、震災以前の一般国道 340 号道路改築（高田バイパス）工事に関連して陸前高田市教育委員会が平成 13 年に調査を行い、縄文時代中期後半の竪穴住居跡や奈良時代の竪穴住居跡を確認している（陸前高田市教委 2002）。

今回掲載した川内遺跡と二日市貝塚の調査歴などは各章に合わせて記載する。

**参考文献**（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター→（公財）岩文埋）

（公財）岩文埋 2015『花館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 638 集

（公財）岩文埋 2017『西和野 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 669 集

（公財）岩文埋 2018『高田城跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 691 集

（公財）岩文埋 2020『令和元年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 721 集

陸前高田市教育委員会 2002『相川 I 遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第 24 集

陸前高田市教育委員会 2018『雲南・瀬沢貝塚・神崎・三日市 II 遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第 33 集

### Ⅲ 調査と整理の方法

#### 1 野外調査の方法

各遺構の調査方法については、ピットなど小型の遺構は二分法で行い、竪穴住居跡などの大型の遺構は、四分法などを用いて行った。各々について堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測は、平面図は(株)タックエンジニアリングによる写真測量、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を併用して行い、断面図は手取りで図化した。

なお、川内遺跡の平面図作成は前述の通り写真測量を実施したが、撮影日は平成28年2月25日、調査が終了したのは同年3月11日であるため、撮影日以降の平面図は作成されていない。また、調査中に標高原点としていた調査区の「斜境杭」については、現場段階の記録がないことから基準となる標高値が不明である。調査メモには、「原点(斜境杭) + 2.48 m = 眼高」のみが記載されている。よって、整理段階では、図面に記載されている「○○m + 杭高」をそのまま掲載した。

遺構・遺物の写真撮影については、デジタル一眼レフカメラとフィルム一眼レフカメラ(モノクロ・カラーリバーサル)を使用した。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、小型遺構は1/10で遺構実測図(第一原図)を作成した。掲載については、凡例に挙げた縮尺にリサイズしている。

なお、調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみで留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。包含層など遺構外遺物は、出土地点・基本層位を記入して取り上げた。

#### 2 整理の方法

遺構の整理は、写真測量データや遺構実測ソフトで図化してきた遺構図データを基に、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら平面図を作成した。断面図は、トレース図化を行った上で、平面図との合成を行った。遺構図版は、各々遺構順に掲載した。断面記録のないものは載せていない。遺構名は現場段階で命名したものを優先し、室内整理で推定される遺構名に変更したものもある。

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。

本報告書掲載にあたっては、登録番号に改めて掲載番号を付した。ただし、観察表には索引しやすいようにいずれの番号も載せた。観察表の( )内数値は残存値、〈 〉内数値は推定値である。

遺物実測は、一部の土器と石器、石製品について高精度の実測図を短期間で完成させるために、(株)ラングが特許取得している「物体の構造線自動抽出システム」による図化を行った。

遺物写真は、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター写場にて写真技師が撮影を行った。撮影には、キャノンEOS 5D(デジタルカメラ・1,200万画素)を使用した。

## IV 川内遺跡の調査

### 1 調査区の位置と基本層序

川内遺跡は、陸前高田市米崎町字川内に所在する。第3図に遺跡範囲と周辺の地形図を示した通り、遺跡は通岡峠の西側付近を水源とする浜田川の中流域にあり、右岸に広がる河岸段丘の南東向き緩斜面に立地する。浜田川の東側には、箱根山(446.8m)から連なる小丘陵が迫っており、古浜田川の氾濫原は本遺跡が立地する右岸側に大きく振れていたと推定される。

遺跡は、標高24～42mにあり、標高の低い箇所は現在の浜田川に接している。今回の調査区の現況は畑地・果樹園で、標高32～33mの地点である。

本地域は花崗岩帯に属しており、現地表面にも至る所に花崗岩巨礫が確認できる。今回の調査でも多くの小径～大径の花崗岩礫が見つかったが、現在の浜田川の規模から古浜田川を考えると、これらの礫がすべて上流域から供給されたと捉えるのは困難である。現在の浜田川にもこれら大径礫を運搬する能力はないと見られることから、遺跡周辺に認められる花崗岩礫は古浜田川によって段丘礫層が開析された際にその場に残積して形成された河川堆積層と考えられる。今回の調査区がある標高32～33mは、現在の浜田川(第二高木橋付近・標高約30m)から西に約50m離れており、今回の調査区付近に古浜田川が存在した縄文時代後晩期から現在までの間に流路が東側へ側方移動し、東側の丘陵に阻まれる形で谷底平野の縁を通り、下刻が進んだものと推測される。

本遺跡の調査は、昭和58年(1983)と平成11・12年(1999・2000)に行われ、今回が4回目の調査である。

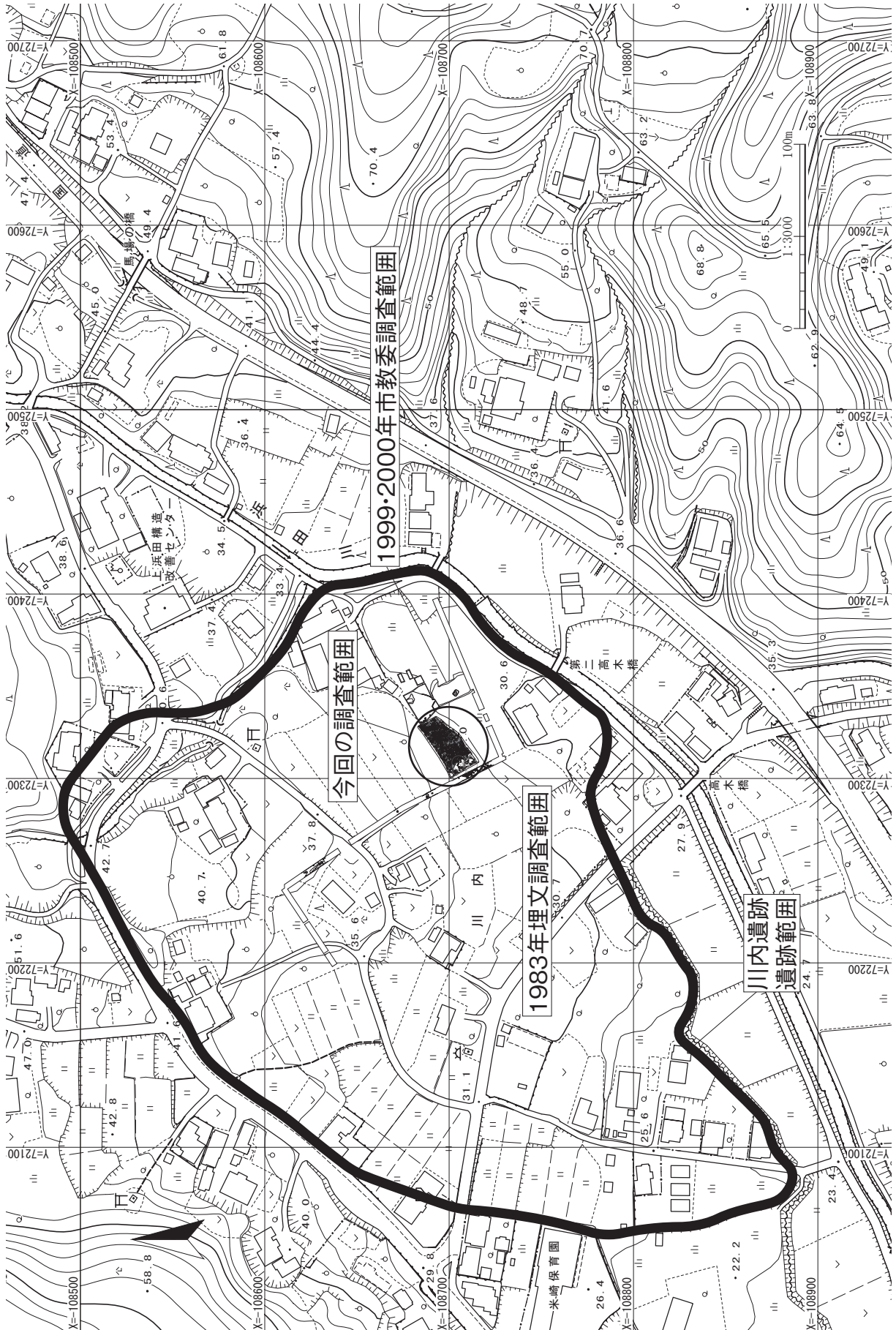
昭和58年の調査は、気仙川地区かんがい排水事業に関連して(財)岩手県埋蔵文化財センターによって行われ、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡3棟のほか、土坑32基(中期末～後期初頭7、後期初頭5、後期中葉4、晩期中葉5など)、晩期前葉の墓坑1基(人骨あり)、中期～晩期までの遺物包含層(後期初頭・晩期主体)が確認された。遺物は、縄文時代中期、後期初頭～前葉、後期中葉、後期末葉、晩期の土器のほか、各種石器、土偶・耳飾り・土錘・鐸形土製品・腕輪形土製品・三角柱状土製品・円盤状土製品などの土製品、石棒・石剣・独鈷石状石製品・石冠・円盤状石製品・垂飾りが出土している((財)岩埋文セ1984)。

平成11・12年の調査は、個人住宅の宅地造成に関連して陸前高田市教育委員会が行い、縄文時代の住居状遺構1棟、土坑5基、土器埋設遺構1基を確認した。遺物は、縄文時代中期後半(大木8b～10式)、後期前葉～後葉、晩期初頭～末葉(大洞B・BC・C1・C2・A・A'式)の土器と、弥生土器(山王Ⅲ層・柘形罎式、和井内東遺跡出土類似土器、円田・橋本式に類似するもの、湯舟沢遺跡出土類似土器)が57×39×13.5cmコンテナで約95箱のほか、石器・石製品1979点(石鏃1012点・尖頭器160点・石錐119点・不定形543点、石棒23点・石刀7点・線刻礫1点・石製円盤7点など)、土製品209点(土偶15点・耳飾り3点・土製円盤173点など)が出土した(陸前高田市教委2003)。

計3回の調査と今回の調査区を第3図に示したところ、昭和58年の遺構が密集する地区と平成11・12年の調査区の間今回の調査区が位置することが分かった。また、平成11・12年の調査区北西側と今回の調査区の北東端が一部重複し、また昭和58年の調査区南側と平成11・12年の調査区南端も一部重複することが確認された(陸前高田市教委2003)。

今回の基本層序は、北東隅から約12mの地点の土層から以下に大別される。





第3図 遺跡範囲と周辺の地形図

## 1 調査区の位置と基本層序

I層	暗褐色砂質土 表土・耕作土	層厚 0.2 m弱
II層	極暗褐色砂質土、小礫数%混入	層厚 0.4～0.6 m
III層	極暗褐色砂質土、拳大礫 20%位混入	層厚不明
IV層	褐色～黄褐色砂質土（斑状）、巨岩～拳大礫多数混入	河川堆積層 層厚不明
V層	風化花崗岩（マサ土）	地山

細別層位については、平成 11・12 年の調査報告に記載されており、計 22 層に分けられている。

### 参考文献

（財）岩文埋 1984『川内遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第 82 集

陸前高田市教育委員会 2003『川内遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第 25 集

## 2 試掘調査

平成 27 年 12 月 3 日～9 日まで試掘調査を行い、T 1～16 の計 16 箇所にトレンチを設定して堆積土層、遺構・遺物の有無の確認を行った。今回の調査予定地の中に、西端から約 3 m 間隔で T 1～7 を南北方向に入れた。幅は 1.2～1.6 m、長さは 18～32 m である。また、T 7 の 3～4 m 東側に、約 3～4 m 間隔で長さ 5～10 m の T 8～11 のトレンチ計 4 本を東西方向に入れた。また、東側に隣接するアパート南側の土地に T 12～14、T 15・16 のトレンチを 2 列に東西方向に掘削している。この結果、T 1～4、8・9 で縄文土器片を出土した。T 2 では、地表から 0.75 m 下から土器底部破片や石棒片が出土し、表土下に堆積する礫混じり黒褐色土（層厚約 0.8 m）に遺物が散在していた。また、T 10 からは、地表から 0.6 m 下に縄文晩期土器を多量に含むピットを確認した。T 11 は、礫混褐色砂質土の地山が西から東に向かって長さ 6 m で、深さ約 2.5 m 下がるほど急に傾斜していた。この傾斜はなお続き、古浜田川の河川堆積物と見られる巨礫混入砂礫層が堆積していた。T 14 は、南東方向の現在の浜田川に向かって傾斜する地形が捉えられた。T 15・16 は表土下の河川由来かと考えられる褐色砂礫層のさらに下位に川原状の砂礫層が露出した。

試掘調査の結果、今回宅地造成する区域を本調査区に設定して平成 28 年 1 月 13 日から着手した。

## 3 調査の経過

平成 28 年 1 月 13 日に調査開始、粗掘を 15 日まで行う。土山を東の窪地寄りに移動。1 月 18 日～20 日、用具などの準備。1 月 21 日、遺構検出（男性 7 名）。中央より西側南半を北から南へ作業。土器片散在出土。北壁際の巨岩の周囲とその南方の暗色土の広がり、要精検（土器片多数）。1 月 22 日、遺構検出。東部から西部へ進める。相変わらず破片はあるものの面積の割りには少ない。縄文中～晩期、土師器（ロクロ）極めて少数→縄文のみの破片多数。遺構くんで発掘区域の測量。基点①灌漑用水路中杭屈折点（南西隅寄り）。基点②用地境界杭（アパート北西角辺）。発掘区上端と住宅用地（緑杭 6 本）、灌漑用水境コンクリート杭（北）。1 月 25 日、遺構検出。調査区境界壁の整形切り下げ作業。1 月 26 日、遺構検出。西寄り 2/5 位残る。1 月 27 日、調査員なしで現場閉鎖。1 月 28 日、新規作業員女性 5 名追加計 12 名。遺構検出は調査区西半へ。1 月 29 日、遺構検出。トレンチ掘削、半裁を進める。2 月 1 日、遺構検出。暗色土掘り取り作業。遺構精査、7-01P（北、長楕円形）、7-02P（南、楕円形）礫多、17-01P、5-01P 撮影。2 月 2 日、遺構精査。掘り下げ→1、11 区住居跡状大 P、1・2 区石群（土器片多数出土）。遺構検出、詰め作業→13 区石群、13 区以東全面。

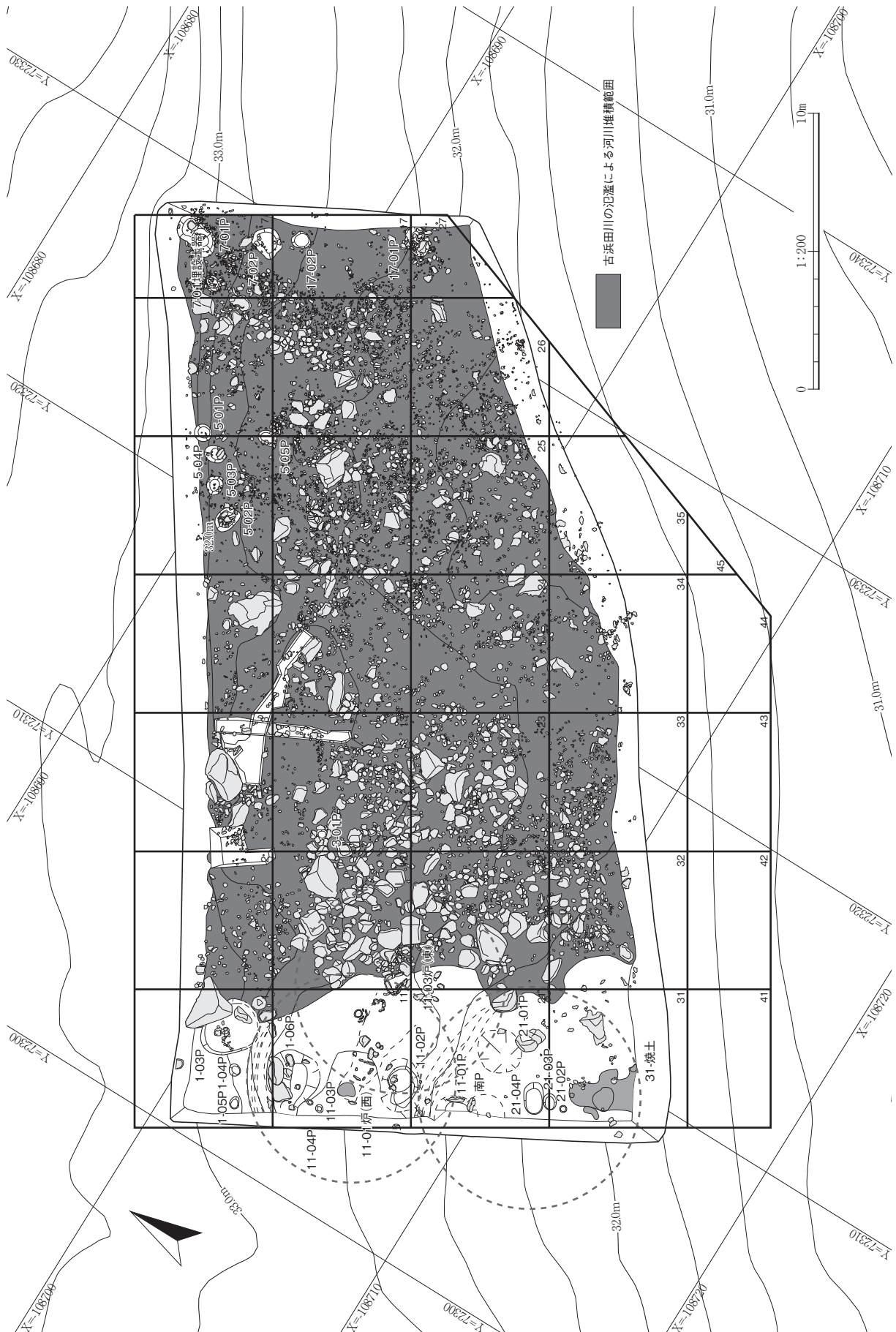
黒色土の徹底除去による地山露出。2月3日、現場閉鎖。2月4日、遺構検出。Ⅱ層（表土と二次堆積褐色土の間の黒～黒褐色の徹底的掘り下げ作業。石群でも、円形配石状のもの1箇所あり。中身は暗褐色土（Ⅱ層）で深い。遺構精査、3-01P、7-02P。2月5日、徹底検出（Ⅱ層土の撤去による遺構プランの確認）。西は住居跡状地山掘り込み遺構追求。巨石集中（石群）。西半の西端は、土器片多量出土。Ⅱ層土も深く入る。東半のうち、北部はⅡ層土の上に地山（Ⅳ層川砂）逆転堆積あり。南部は、地山が西と同じレベルに残存。小ピット状暖色部のダメ押し。東半は、不定形ピット状凹み傾斜沿いに連なる。川の流れか。まともな土坑らしきもの複数あり（掘り込みのしっかりしているもの、ピット内に礫を人為的に？入れたもの）。11区Ⅲ層下に石囲炉、12区Ⅱ層下（西半）の西端に組石？2月8日、西半北東端の石囲状石組。1-01P、1-02P、1-03P、25-01Pなど精査。2月9日、検出続行。2月10日、16区Ⅱ～Ⅲ層石群南・東・北・東端近くのダメ押し検出。西端南半検出で、終了間際南壁下端に石棒露出確認。2月11日、現場閉鎖。2月12日、西端南半住居跡の北壁検出。石群西半の掘り下げ。石群東半東端の土坑状黒色土塊掘り下げ。調査区東端黒色土掘り取り。石群西半の組石、集石が次第に見えてくる。円形状に大石並ぶパターン増加。2月15日、西端住居跡の南半の壁と中の暗色土掘り取り。石群の掘り出し（南と東の石の形暗色土掘り取り）。西半の北端砂利混じりのダメ押し下げ。東端の半掘ピットの完掘。石群中央逆転層ピットの実測。2月16日、遺構検出。石群南と東。3区汚れ砂利層掘り下げ。西端は1-03P半掘、1-05P半掘の記録。東端は7-01P完掘（深くなる断面要直し）、7-02P3個の重複状況。2月16日、現場閉鎖。2月18日、東半ピット5-03・04P、埋設土器の精査、西端住居跡状東側掘り下げ。2月19日、基本土層、ピット処理5-01・02P、1-05P。2月22日、ピット処理5-01～04P。2月23日、男性作業員6名再参加。調査区、南以外の全域壁の清掃。掘り下げ2区大土坑。底見える、Ⅲ層土。石群西の複式炉状配石（土器埋設）、上のNWで小礫配置埋設土器炉発見。5-05P、21-02炉精査。2月24日、21区南段差際P（南P）大木9式土器大片出土（隆起線文）。1区不整形土坑（21区の北P）精査。2月25日、調査員休み。全区清掃。2～3区掘り下げ。2月26日、1-06P東端掘り下げ、11-01P南壁に石詰土坑あり（複合）上に大長石あり（下に黒土、土坑の上部）、11-02P半掘中大木9式片出土、21-01P半円形の壁（北）あり、31-焼土広範囲に広がり、中に石囲炉状配石数ヶ所あり。北端大石（1-03P）の東に広がる汚れ砂利層掘り下げ。遺構記録（未記録遺構、調査区全体の土層、西端P群）。2月29日、天候不良で現場閉鎖。3月1日、21-01P完掘、11-02P半掘。3月2日、11-02P完掘、11-01P底確認（ピットの一部らしい）、21-01P完掘（なお南西に広がるか、切り合いあり）。3月3日、午後作業。埋め戻し打ち合わせ。3月4日、1区調査。3月7日、1区石囲炉（西の土器埋設複式炉）、1区土器埋設炉（礫飾り、中）、1区石器脇の土器埋設炉（東）の半掘と写真。21-02～05Pの完掘と写真。31-焼土の写真。11-02P完掘と写真。3月8日、3炉sec実測。21-02P（下2P複合か、2段底）完掘と写真。21区北西隅柱穴状小P2個完掘と写真。3月9日、実測残務（西壁sec、焼土、大小P、secP、座標位置を平板記録）。プランは写真記録。埋設土器収容。午後、北側から埋め戻し開始。3月10、11日、埋め戻し。調査終了。

## 4 検 出 遺 構

### (1) 概 要

今回の調査から、縄文時代の竪穴住居跡3棟、土器埋設遺構1基、ピット18個を確認した。

1 調査区の位置と基本層序



第4図 調査全体図

第4図に調査全体図を示した。遺構は、調査区南西端と北～北東端にかけて、密集して検出されている。遺構同士の切り合いが多くあり、複数時期に形成された集落と考えられる。また、調査区全域に古浜田川の氾濫による河川堆積物が覆っているが、西端にある出土土器から縄文時代中期末葉に比定される竪穴住居跡を覆っているものの、東側に確認された縄文時代晩期前半の土器埋設遺構、ピットはこれを切っている。このことから、古浜田川による河川氾濫は縄文時代中期末葉以降から晩期前半までの間に発生し、その後、現在の浜田川が流れる南東方向へ徐々に側方移動したと推定される。

写真図版6に河川堆積状況断面を示したが、一部で砂礫層の下位に黒褐色土を挟み込む様子が確認されており、遺物包含層もしくは遺構が河川堆積層の下に広がる可能性も指摘される。

縄文時代中期後半は、竪穴住居跡3棟などがいくつかの時期に重複しながら形成されていたと考えられ、河川流路はまだ東側に離れていたと推定される。西側の昭和58年調査区でも竪穴住居跡が確認されていることから、遺構は少なくとも今回の調査区の西側に広がっていた可能性がある。

河川の氾濫期を挟んで、縄文時代晩期前半には土器埋設遺構やピットなどが河川堆積層上位に形成される。この頃、河川氾濫による流路の移動は、再び東側へ離れていたと考えられる。

これ以降は、平成11・12年調査で確認された遺物包含層のプライマリーな堆積状況から、調査区付近は安定的に陸地化が進んだと見られる。

## (2) 竪穴住居跡

### 竪穴住居跡1 (第5図、写真図版3)

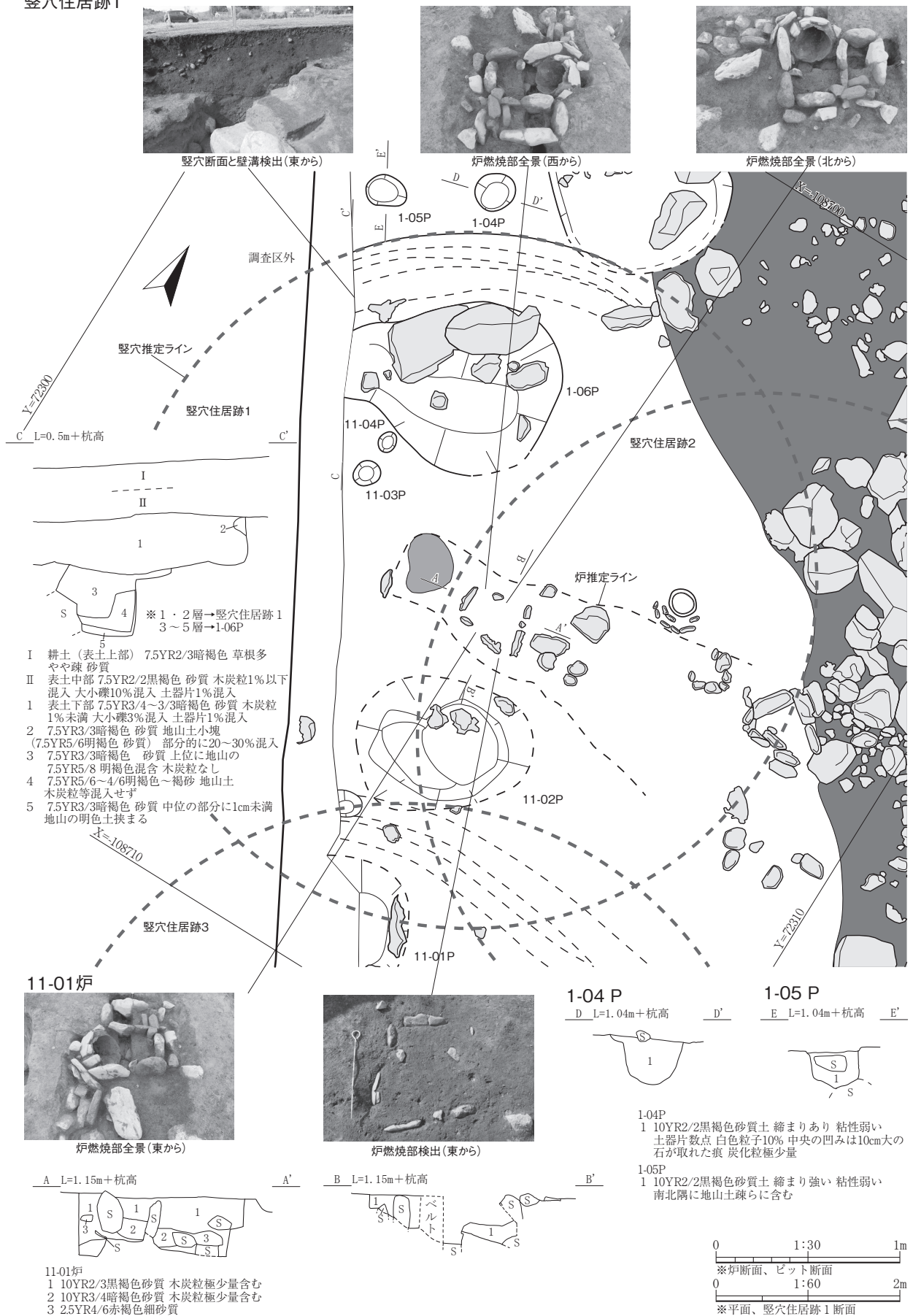
調査区北西端のX=-108705、Y=72305付近に位置する。竪穴住居跡2・3プランと重複し、竪穴住居跡2に切られる。現場段階では単体の11-01炉と認識されていたが、整理段階で調査区境に竪穴の掘り込みと壁溝を確認し、11-01炉を斜位土器埋設複式炉と考え、竪穴住居跡1とした。規模・形状は、径7.5mの円形基調と見られるが、炉の規模によってはやや小さめの可能性がある。床面は地山でほぼ平坦に構築されている。埋土は、調査区境の断面C・1層から7.5YR3/4～3/3暗褐色砂質土主体で構成される。床面推定範囲から11-03Pと11-04Pの柱穴状ピット2個を確認しており、本遺構の柱穴と推定される。この他のピットは検出されていない。前述した通り、床面推定範囲の東寄りに斜位土器埋設複式炉1基を確認したが、現場段階で平面図が作成されておらず、詳細は不明である。写真からは、2箇所の燃焼部に前庭部が付く構造で、中央の石囲部南側に36深鉢が斜位に埋設されている。

36深鉢は縄文時代中期末葉に比定され、この他に推定範囲内から285円盤形土製品が出土しており、炉埋設土器の時期から、該期に廃絶した遺構と考えられる。

### 竪穴住居跡2 (第6図、写真図版3)

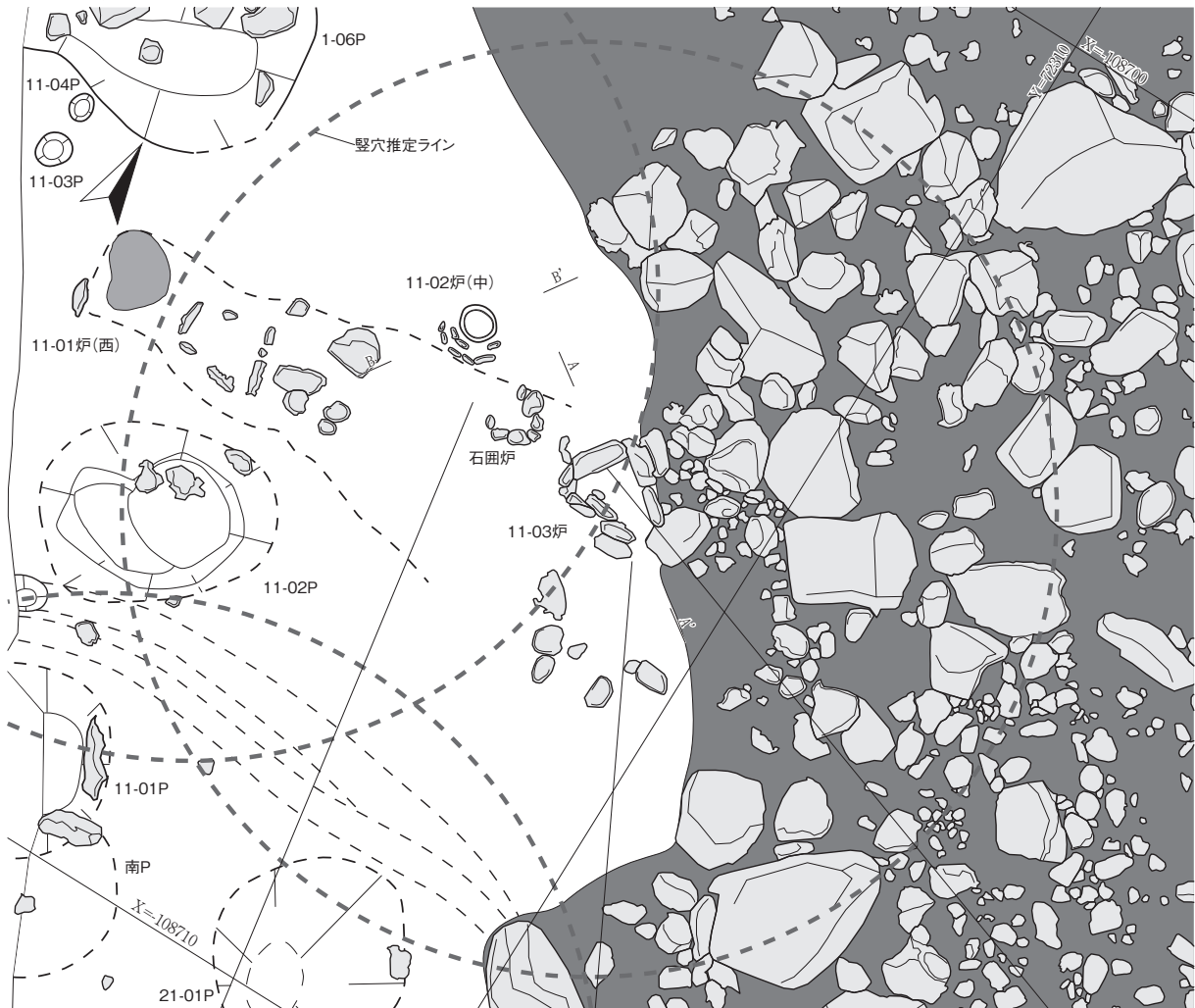
調査区北西側のX=-108705、Y=72309付近に位置する。竪穴住居跡1・3プランと重複し、竪穴住居跡1を切る。現場段階では単体の11-03炉と認識されていたが、整理段階で炉の向きと竪穴住居跡1との関係から、竪穴住居跡2とした。なお、プラン内に11-02炉と石囲炉各1基があり、重複関係から竪穴住居跡1よりは新しいことが分かっており、本遺構との関連は不確定であるが、付属施設として本遺構に含めた。今後検討を要する。規模・形状は、竪穴住居跡1と同規模の径7.5mの円形基調と推定されるが、炉以外の床面施設は見つかっておらず、不確定である。遺構東側は、河川堆積層に覆われており、遺構プランの広がりが見込まれるが現場段階では明らかではない。3・13区に入れた南北トレンチでは、河川堆積層の下に遺物を含む黒褐色砂質土が認められていることから、少

竪穴住居跡1



第5図 竪穴住居跡1

竪穴住居跡2



11-02 土器炉と隣接する石囲炉 (北東から)



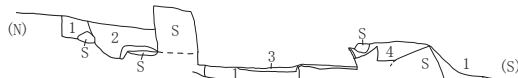
11-03 炉全景 (南から)



炉石の下に入れられた礫 (北西から)

11-03 炉

A L=1.30m+杭高



11-03 炉

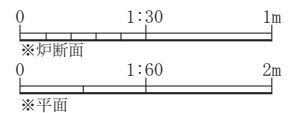
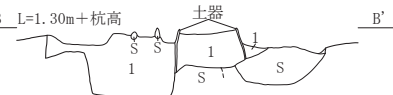
- 1 10YR4/6 褐色砂質土 極小粒砂 3cm程度礫混じり
- 2 10YR3/2 黒褐色砂質土 極小～中粒砂 1層が斑に入る
- 3 2.5YR4/8 赤褐色砂質土 極小粒砂 土器埋設
- 4 10YR2/2 黒褐色砂質土 極小～小粒砂

11-02 炉

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質土 木炭粒極少量 小～中粒砂

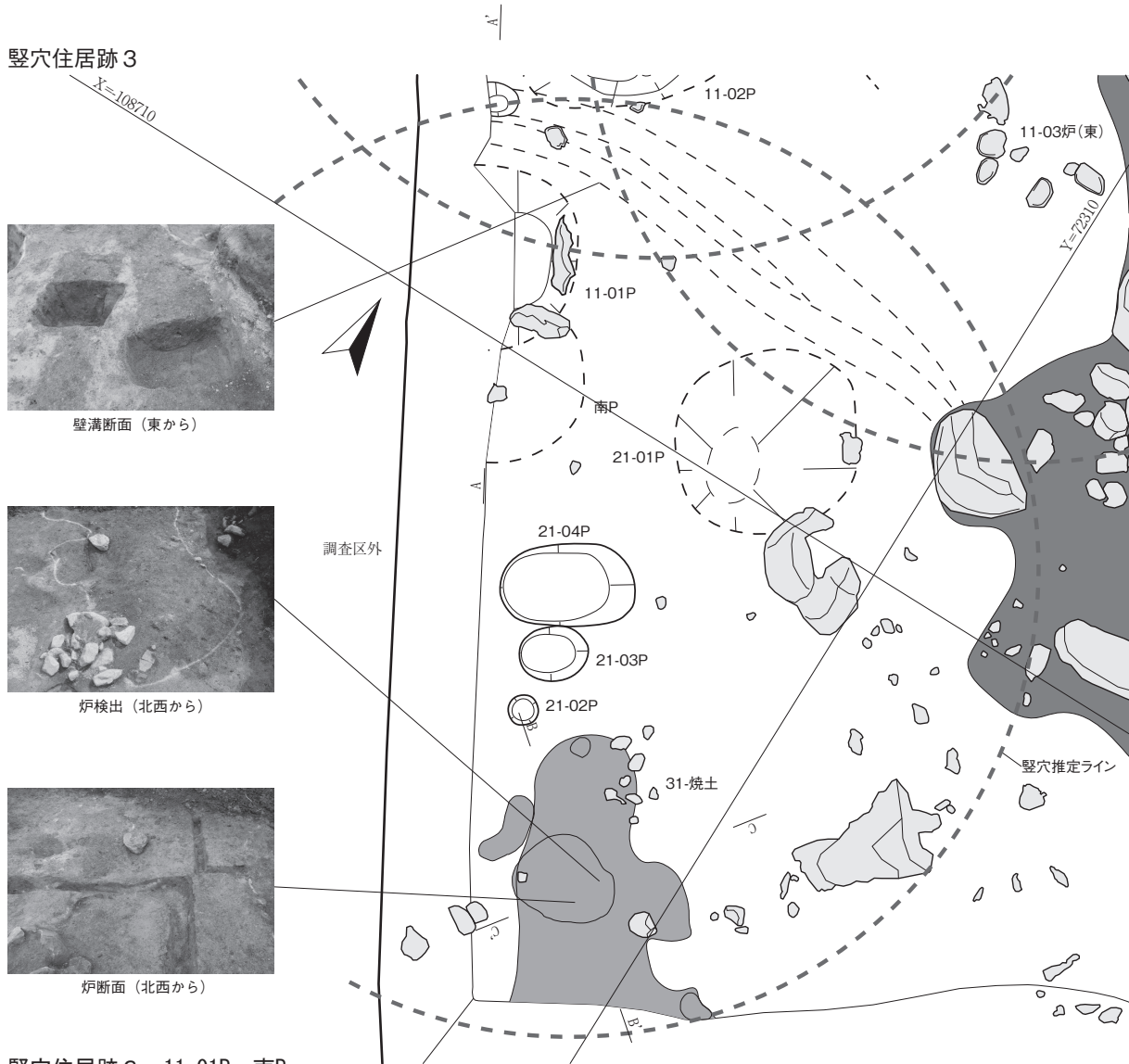
11-02 炉

B L=1.30m+杭高



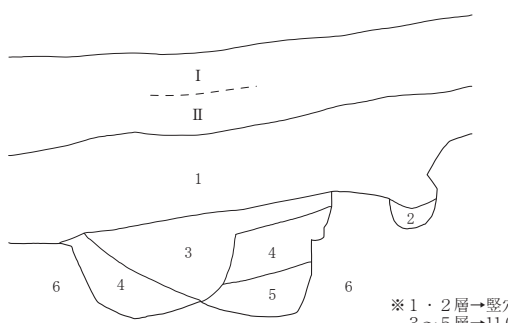
第6図 竪穴住居跡2

なくともこの範囲までは河川堆積層に覆われていると推測される。11-03 炉として確認された炉は、斜位土器埋設複式炉と見られるが東半を河川堆積層が覆っており、全形は把握できない。埋設土器などを表した炉の平面記録が作成されておらず、写真から確認された部分は燃烧部の1つと見られ、不整形に石で囲われた東側に、斜位に埋設土器が設置されている様子が認められる。調査メモには、北



竪穴住居跡 3、11-01P、南P

A L=0.5m+杭高



竪穴住居跡 3、11-01P、南P

- I 耕土 (表土上部) 7.5YR2/3暗褐色 草根多 やや疎 砂質 大小亜角礫30%混入
- II 表土中部 7.5YR2/2黒褐色 砂質 木炭粒1%以下 混入 大小亜角礫30%混入 土器片1%混入
- 1 表土下部 7.5YR3/4~3/3暗褐色 砂質 木炭粒1%未満 大小礫3%混入 土器片1%混入
- 2 7.5YR4/4褐色 地山の明色砂質土にIII層土から30%混入砂質
- 3 7.5YR3/2黒褐色 亜角礫人頭大5~6個混入 砂質 (砂礫)
- 4 7.5YR4/4~4/6褐色 掌大以下礫2~3個混入砂質 (砂礫) 木炭粒1%未満
- 5 7.5YR3/4暗褐色 2より暗色砂質 北壁際に礫投込あり 木炭粒1%未満
- 6 地山 この付近ではシルト質 局部的に川の砂礫層挟む

※1・2層→竪穴住居跡1  
3~5層→11-01P、南P

炉断面B

- 1 10YR4/4褐色砂質土 極細粒砂~極粗粒砂 炭化物少量
- 2 2.5YR4/6赤褐色砂質土 極細粒砂~細粒砂
- 3 10YR3/4暗褐色砂質土 細粒砂~粗粒砂
- 4 10YR2/3黒褐色砂質土 細粒砂~極粗粒砂

炉断面C

- 1 10YR7/8黄褐色砂質シルト 締め強い
- 2 2.5YR4/6赤褐色砂質土 細粒砂~中粒砂
- 3 10YR2/2黒褐色砂質土 極細粒砂
- 4 10YR3/4暗褐色砂質土 細粒砂~粗粒砂
- 5 断面A・1層と同じ

竪穴住居跡 3 炉

B L=2.20m+杭高



C L=2.20m+杭高



0 1:30 1m

※炉断面

0 1:60 2m

※平面、竪穴住居跡3断面

第7図 竪穴住居跡 3、11-01P・南Pピット



半の囲い石（長さ 50cm×幅 19cm×厚さ 14cm）の下に、鏡餅状の丸平石あり。また、埋設土器の下と脇には転がらないように数個の長さ 5cm位の小石片が添えてある。囲い石は東 2 個、北 1 個、南大石 1 個に添えて斜めに 1 個、西に 2 個。いずれも側辺を下にして立っている。非方形の囲い。両側が斜めになると記されている。また、11-02 炉と認識された土器埋設炉については、口径 24cm、地山の黄褐色砂質シルトに 7cm上を残し直立埋設完形。周囲に長円礫を並べていた。現存南側に 10 個、4 点円形、5 個の内 4 個残る。中心から半径 30cmと 20cm。礫間は 2～5cm間隔、長さ 15～16cmの礫側を立てて半分埋まる。方形石囲炉（汚れ土の上）より 10cm程下の平面（地山）。この炉はあまり焼土が目立たない。上部のみの土器の下に 16×18×6cmの卵形の平らな石あり。この石の北東に地山中の大石あり（花崗岩か）。風化花崗岩礫 10cm長位の石片 10×10cmの 2 個の石で平面を作る。なお、土器中の埋土の底には拳大の石 1 個が少し浮いて入っていた。この土器の中の土はあまり焼けていないと記録されている。隣接する石囲炉は断面図・メモなど記載がなく不明だが、11-02 炉に隣接し、同一面に構築されている。これを炉とした別の竪穴住居跡の可能性も含めて、今後検討を要する。

11-03 炉に埋設されていた 37 深鉢と、11-02 炉に埋設されていた 29 深鉢はいずれも縄文時代中期末葉に比定されることから、本遺構の廃絶時期もこの時期に求められる。

### 竪穴住居跡 3（第 7 図、写真図版 3～5）

調査区南西端の X = -108710、Y = 72310 付近に位置する。竪穴住居跡 1・2 プランと重複するが、新旧関係は不明である。現場段階では単体の 31- 焼土と認識されていたが、整理段階で調査区境に竪穴の掘り込みと壁溝を確認したことから、31- 焼土を竪穴住居の炉の残骸と考え、竪穴住居跡 3 とした。規模・形状は、径 8.0 m の円形基調と見られるが、炉の規模によってはやや小さめの可能性がある。床面は地山でほぼ平坦に構築されている。埋土は、調査区境の断面 A・1 層から 7.5YR3/4～3/3 暗褐色砂質土主体で構成される。床面推定範囲から 21-02P、21-03P、21-04P のピット 3 個を確認しており、本遺構に伴うと見られる（断面記録なし）。また、北西側の調査区境に壁溝と重なるピット 1 基を確認しており、壁柱穴の可能性はある。前述の通り、南東端にある 31- 焼土を本遺構に伴う炉と考えたが、炉石は抜き取られたと見られ残存していなかった。廃絶時に炉を人為的に壊して埋めた可能性も考えられる。

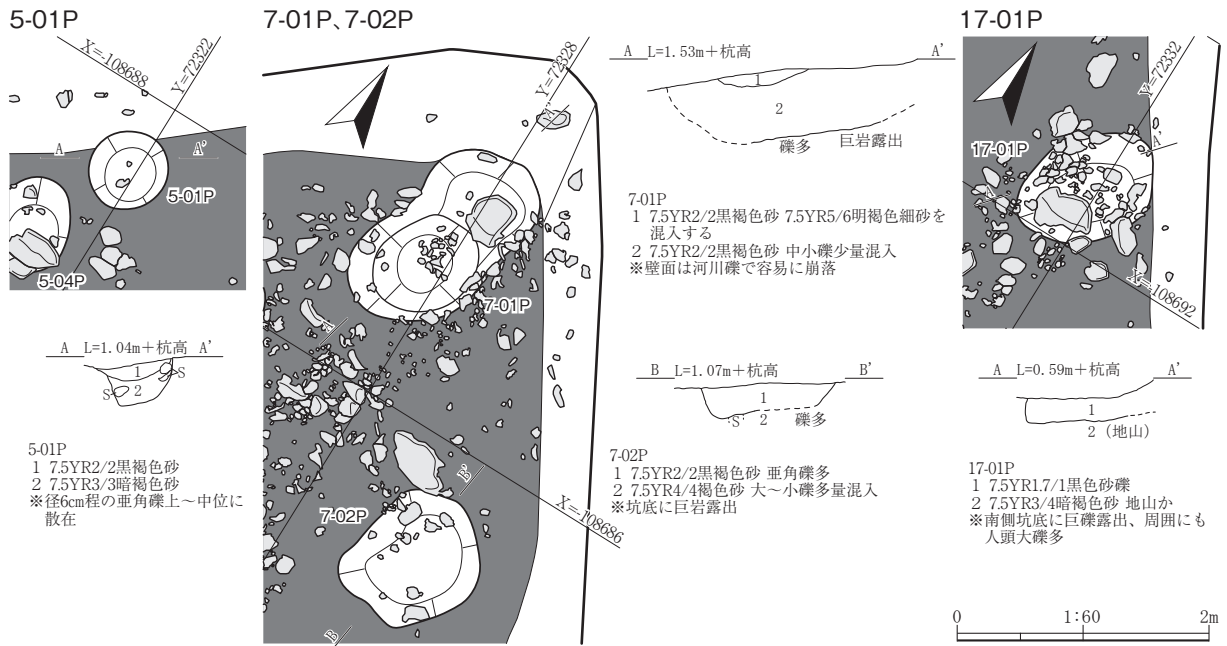
炉や床面推定範囲内で、本遺構に伴う遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明だが、竪穴住居跡 1 とプランがほぼ同規模であることから、同時期の縄文時代中期末葉に廃絶した遺構と考えられる。

## （3）土器埋設遺構

### 7-01 土器埋設遺構（写真図版 5・6）

調査区北東端の X = -108686、Y = 72326 付近に位置する。現場段階での土器が埋設された平面・断面図の記録はない。6 区東端に巨岩あり。その東 20cmのところ、土器が埋設されている。周囲は小児頭大～大人頭大の垂角礫が多く混じる川砂層。そこに、黒色土坑あり、北東に口縁部、南西に底部がある全面斜縄文鉢形土器が斜位に埋め込まれている。胴径は 40cm弱、器高は 40cm余りか。器壁厚 5mm。土器内埋土は、7.5YR2/3 極暗褐色砂で礫少量含む。掘り方は、楕円形で 60×50cmで、南北に長軸を持つ。壁は砂礫層、底は砂礫層で大礫 3～4 個あり。深さ -50cm。204 深鉢から、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

4 検出遺構



第8図 5-01P、7-01P、7-02P、17-01P ピット

(4) ピット

1-03P (図・写真なし)

調査区北西隅の X = -108700、Y = 72304 付近に位置する。北寄り巨岩の西に食い込む長楕円形。検出面 3 箇所に土器片点在。途中、予想外に地山土深く点在。埋土から中期末葉の 39 深鉢と、後期初頭の 67 注口、217 有茎石鏃、259 スクレイパー類を出土し、掲載した。出土土器から、縄文時代後期初頭に降に廃絶した遺構と考えられる。

1-04P (第5図、写真図版4)

調査区北西隅の X = -108703、Y = 72305 付近に位置する柱穴状ピットである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

1-05P (第5図、写真図版4)

調査区北西隅の X = -108706、Y = 72303 付近に位置する柱穴状ピットである。規模・形状は長径 1.43 m、短径 1.03 m の不整形、断面は皿形で深さは 0.33 m である。単層。埋土上～中位石 1 個入る。暗褐色砂質土 (Ⅲ層) 底にも石露出。埋土上位にも石 1 個。地山大ブロック、角張ったやや大きい石など入る。縄文時代晩期末葉の 155 鉢が出土しており、この時期に廃絶した遺構と考えられる。

1-06P (第5図、写真図版4)

調査区北西隅の X = -108706、Y = 72304 付近に位置する。規模・形状は長径 2.3 m、短径 1.9 m の不整形、断面は鍋底形で深さは 0.7 m である。竪穴住居跡 1 に切られており、住居より古い。縄文時代晩期末葉の 154a・b 鉢を出土しており、遺構の切り合いと齟齬が生じているため、上層から出土の遺物を登録した可能性がある。他に、232 無茎石鏃、254・255 スクレイパー類が出土している。

## 3-01P (写真図版4)

調査区北西側の X = -108700、Y = 72313 付近に位置する。径 40cm、規模は深さ 30cm + a、暗褐色砂質土の埋土である。周囲に、大 5 (丸)、中 1 (1/4 割)、小 2 (小石片) の計 8 個の石あり。大は 20 ~ 30cm 大。頭の高さは不揃い。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から河川堆積後の縄文時代の遺構と考えられる。

## 5-01P (第 8 図、写真図版 4)

調査区北東側の X = -108688、Y = 72323 付近に位置する。明褐色砂層面で、暗褐色円形プランを検出した (南側は一段浅く下がる)。規模は 0.55 m 前後、深さ 0.35 m の丸底で、底径 0.4 m である。埋土は上層が礫混じり黄褐色砂、下層が褐色砂で上下ともに礫混入する。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

## 5-02P (図・写真なし)

調査区北東側の X = -108692、Y = 72320 付近に位置する。埋土中に礫が多く混入している。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

## 5-03P (写真図版 4)

調査区北東側の X = -108690、Y = 72321 付近に位置する。規模は、長径 0.7 m、短径 0.45 m の楕円形で、壁は混礫細砂 (一部に砂礫ブロック層あり) で構成される。底は 2 段になっており、上は平らで 0.6 × 0.35 m、下の南西隅は 0.38 × 0.25 m で底に巨礫がある。埋土は、上層 (1 層) が 7.5YR2/2 黒褐色砂質土、下層 (2 層) が上よりやや明色、7.5YR2/3 極暗褐色砂質土である。埋土下位から、222 無茎石鏃を出土している。出土土器がなく不明だが、縄文時代の遺構と考えられる。

## 5-04P (写真図版 4)

調査区北東側の X = -108688、Y = 72322 付近に位置する。規模は径約 0.55 m、北に複合する径 0.4 m のピットがある。深さは 0.3 m で丸底である。埋土は 7.5YR2/3 極暗褐色砂質土で構成され、南半は大 ~ 小礫が多数認められる。壁は、この辺り帯礫混じり細砂層で、一部に粗砂層散在する河川堆積層である。埋土下部から、233 無茎石鏃が出土している。出土土器がなく不明だが、縄文時代の遺構と考えられる。

## 5-05P (図・写真なし)

調査区北東側の X = -108691、Y = 72325 付近に位置する。規模・形状は、歪長円形で南北軸が長い 0.7 × 0.5 m、深さ 0.5 m である。底は丸底で暗褐色砂礫、壁は細砂で明褐色礫混じりである。埋土中に大小 16 個の礫が混入しており、人為的に剥離、打割された石 3 個含む。土器片を少量出土しているが、詳細な時期は不明である。

## 7-01P (第 8 図、写真図版 5)

調査区北東隅の X = -108685、Y = 72328 付近に位置する。規模・形状は、南側が  $(1.5 + a) \times 1.0$  m の深さ約 1.0 m、底径 0.4 m の平底、北側が  $(1.5 + a) \times 0.9$  m の深さ約 0.7 m、底径 0.4 + a m の複合した円形を呈する。ピット境に巨石露出しており、埋土中に大小多数の礫が含まれる。埋土中か

ら、縄文時代中期後葉の1深鉢と中期末葉の21深鉢が出土しており、該期に廃絶した遺構と考えられる。

7-02P（第8図、写真図版5）

調査区北東隅のX=-108697、Y=72330付近に位置する。規模・形状は長径1.06m、短径0.97mの不整形円形、断面は皿形で深さ0.24mである。埋土は7.5YR2/2黒褐色砂質土で構成され、木炭粒を多く混入する。礫も多量に含む。埋土から、縄文時代後期初頭の74深鉢、227無茎石鏃が出土していることから、該期に廃絶した遺構と考えられる。

11-01P・南P（第7図、写真図版5）

調査区南西端のX=-108710、Y=72306付近に位置する。竪穴住居跡3プラン内にあり、本遺構が古い。規模・形状は、11-01Pは長径1.57m、短径（0.52）mの楕円形、断面は不整形で深さ0.9m、南Pは長径1.3m、短径（0.73）mの楕円形、断面は鍋底形で深さ0.73mである。断面の切り合いから、南Pの方が新しい。縄文時代中期末葉の11・38深鉢、後期初頭の55深鉢、晩期末葉の165鉢・195台付浅鉢が出土しているが、遺構の切り合いから55・165・195は混入と見られる。遺構は、縄文時代中期末葉と同じかそれ以前に廃絶したと考えられる。

11-02P（写真図版5）

調査区南西端のX=-108707、Y=72306付近に位置する。検出面ピット中央に自然石2個あり。その西の風化礫（径10～15cmの粗粒花崗岩）の下に、鉢形土器の下半が南東に倒れる形で埋まっている。埋土から縄文時代中期末葉の14・16・25・30・33深鉢が出土しており、この時期に廃絶した遺構と考えられる。

17-01P（第8図、写真図版5）

調査区南東側のX=-108692、Y=72332付近に位置する。褐色川砂層上面、黒色の歪んだ円形プランで検出した。規模は、長径1.0m、短径0.75mで、深さは0.2mである。埋土は、拳大の礫を東隅に数個含む黒色砂質土の単層である。244石錐を出土しているが、時期を特定できる土器は出土しなかった。周辺遺構の所属時期から、縄文時代の遺構と考えられる。

17-02P（写真図版5）

調査区北東側のX=-108687、Y=72330付近に位置する。規模は径0.6m、深さ0.65mを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層で構成され、壁は河川堆積の砂礫層である。断面記録はせず、完掘した。土器片を少量出土したが時期は特定できず、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

21-01P（写真図版5）

調査区南西側のX=-108710、Y=72308付近に位置する。竪穴住居跡3プラン内にあり、本遺構が古い。埋土は、7.5YR3/3暗褐色の木炭粒混じり砂礫土で構成され、大小礫が西壁寄りに多く混入する。南端はさらに複合関係で広がる可能性がある。西半の南への広がり作業中止した。231無茎石鏃、260スクレイパー類を出土したが、時期を特定できる土器は出土しなかった。新旧関係から、竪穴住居跡3よりも古い縄文時代の遺構と考えられる。

## 5 出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、土器 213 点、石器 67 点、土製品 15 点、石製品 3 点の計 298 点を掲載した。以下に、遺物の種類ごとに記載する。

### (1) 土 器

今回の調査から、縄文時代中期、後期、晩期、弥生時代前期の土器が出土した。現場段階で、出土土器の大半がグリッドで取り上げられていることから時期別に掲載したが、小破片が多く捉え間違いが含まれる可能性もある。掲載にあたっては出土土器を時期ごとにⅠ～Ⅵ群に分け、その上で特徴によってさらに細別した。なお、個別の特徴については観察表に記載している。

#### Ⅰ群 縄文時代中期

A 類は、中期後葉の大木 9 式新段階に相当する。口縁部に文様を持たず、沈線主体で施文される (1～3)。B 類は、中期末葉の大木 10 式古段階に相当し、沈線主体で施文される (4～11)。C 類は、同じく中期末葉の大木 10 式新段階に相当する。微隆起線文による文様表現を特徴とし、文様境界に鱗状突起を貼り付けたり、微隆起線文に沿って刺突列が施される (12～37)。38～41 は特定できる文様などは残存していないが、B・C 類に含まれると考えられる。

#### Ⅱ群 縄文時代後期初頭

A 類は門前式第 2 段階に相当し、ボタン状貼付文や連鎖状隆線文が施文される (42～48)。B 類は門前式第 3 段階に相当し、沈線文主体で表現される。ボタン状貼付文は盲孔 (窩文) へ置き換わる (49～67)。C 類は綱取Ⅱ式に相当する土器群で、窩文を起点とする横流れ S 字状文などが表現される。70 は中段階、その他は古段階の特徴を有する (68～73)。74～79 は特定できる文様は残っていないが、この時期に含まれると考えられる。

#### Ⅲ群 縄文時代後期前葉後半～中葉

80～93、95～97、100～105 は、十腰内Ⅰ式 (新) に相当し帯縄文文様や磨消縄文文様が展開する。また、106～108 は多重平行沈線文様が展開するものは、中でも新相に位置付けられる。94・98・99 は、新山権現社Ⅱ式に相当し曲線带状文などが施される。

#### Ⅳ群 縄文時代後期後葉

A 類は瘤付土器第Ⅰ段階に相当し、入組带状文などの弧線を組み合わせた磨消文様が展開するが貼瘤が多用されない一群である (109～113)。また、B 類は瘤付土器第Ⅱ段階に相当し、貼瘤が口縁部や屈曲部、頸部に多用される (114・115)。C 類は刻目列などを用いて多段化した入組文が展開する (116～118)。D 類は縄文や刻目が充填される 2 段の入組带状文が多用され、貼瘤をほぼ持たないものである (119～126)。

#### Ⅴ群 縄文時代晩期

A 類は晩期初頭の大洞 B 1～2 式に相当し、入組三叉文、魚眼状三叉文が展開する一群で、深鉢・鉢・注口が出土している (127～137)。B 類は晩期中葉の大洞 C 1～2 式に相当し、半肉彫り的な雲

形文やC字状文、羊歯状文が退化した二溝間の截痕が施文される。小破片のため明らかでないが、鉢や台付鉢、浅鉢、壺、注口が出土している（138～152）。C類は晩期末葉の大洞A'式に相当し、変形工字文、匹字文が展開する。文様帯幅は弥生時代前期の山王IV上層式や青木畑式に比べて狭い。器種は深鉢、鉢、浅鉢、台付浅鉢、壺が出土している（153～203）。また、204～211は、晩期の粗製深鉢である。このうち、204～209は晩期前半、210・211の無文帯区画を有するものは晩期中葉と考えられる。

## VI群 弥生時代前期

212・213は、青木畑式の浅鉢もしくは高坏と考えられ、変形工字文が施文される。

### (2) 石 器

#### 尖頭器（214～216）

3点を掲載した。214は柳葉形の尖頭器で、茎を有する。215・216は、214よりも小形の茎を持たないものである。

#### 石鏃（217～241）

25点を掲載した。217～220が有茎、221～237が無茎凹基、238～241が無茎平基である。無茎凹基のうち、221・222は基部の平面形がやや丸みを帯びるもの、223・224は基部が外側にやや屈曲するもの、225～227は幅広の器形を持つもの、228・229は基部に膨らみを持つもの、230・231は膨らみを持ちながらも短い基部のもの、232～237は側縁の形状がやや湾曲するものといくつかのまとまりが認められる。224は黒曜石製だが、産地同定は実施していない。

#### 石錐（242～250）

9点を掲載した。二次加工が全面に及ぶもの（242・243・247・248）と、二次加工が端部中心に施されるもの（244～246）がある。249・250は、石鏃からの転用の可能性がある。

#### 石匙（251・252）

2点を掲載した。いずれも縦型の石匙で、252は両面に調整が及ぶ。

#### 筥状石器（253）

1点を掲載した。刃部は両面に調整が施される。

#### スクレイパー類（254～263）

10点を掲載した。257・261・262は石鏃未成品、263は尖頭器未成品の可能性がある。また、256の裏面の一部に黒色付着物の痕跡がある。

#### 磨製石斧（264～271）

8点を掲載した。やや小型の264以外は、いずれも使用による破損品である。264は北海道日高山脈付近で産出するアオトラ石製と見られ、製品もしくは素材のみの搬入品である可能性がある。271は未成品で製作途中で欠損したか、もしくは使用したため、基部側1/2を欠く。

**打製石斧 (272)**

1点を掲載した。基部を欠損しており、使用時に柄に装着されていたことが窺える。

**磨石 (273)**

1点を掲載した。両面に使用痕跡を有する。在地産の円礫を使用している。

**凹石 (274～276)**

3点を掲載した。いずれも端部を敲石として使用しており、二つの機能を併せ持っている。

**敲石 (277・278)**

2点を掲載した。小形の敲石で、石器製作に使用された可能性がある。

**石皿 (279・280)**

2点を掲載した。いずれも欠損しているが、正面に擦痕を有する。

**(3) 土 製 品****土偶 (281)**

1点を掲載した。281は土偶の左腕部もしくは左脚部で、刺突を施文する。後期中葉か。

**三角壙形土製品 (282)**

1点を掲載した。端部のみが残存しており、両面及び側面に刺突文が施文される。胎土はやや粗い。中期後半と考えられる。

**斧形土製品 (283)**

1点を掲載した。端部のみが残存しており、両面に縄文LRが施文される。中期後半と考えられる。

**鐸形土製品 (284)**

1点を掲載した。頂部の突起に貫通孔を有する。ミニチュア土器の胴部突起の可能性もある。

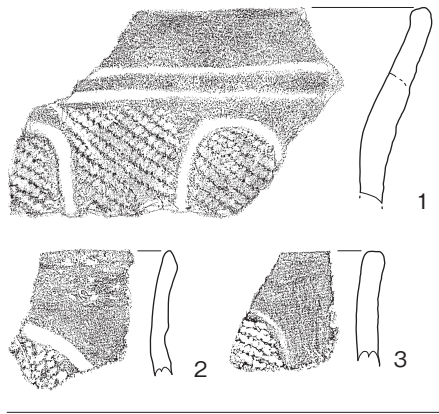
**円盤形土製品 (285～295)**

11点を掲載した。全周に摩滅痕跡を有するものと、打ち欠き整形の痕跡を持つものがある。

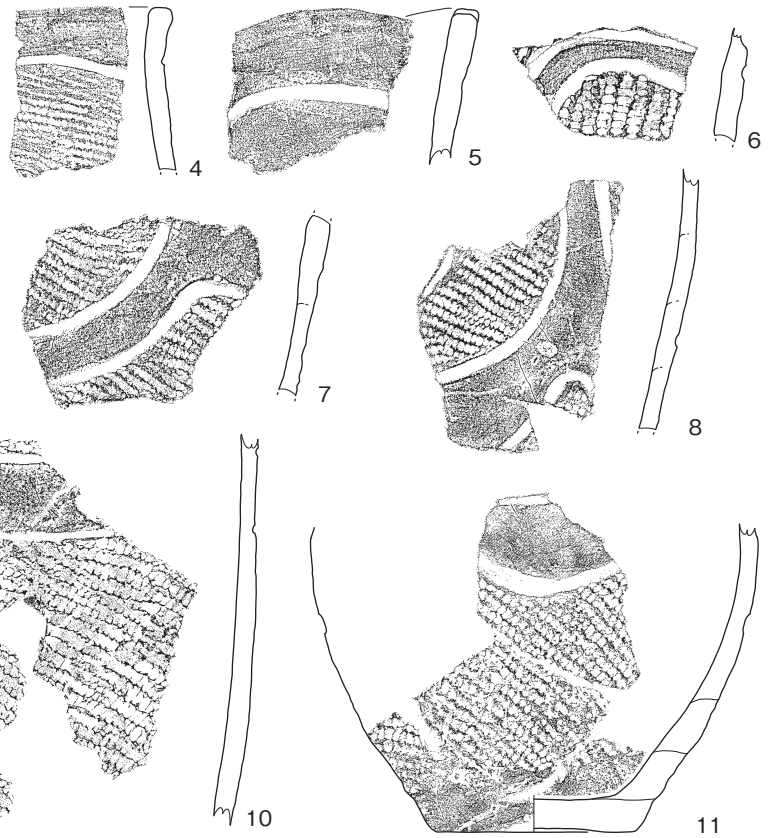
**(4) 石 製 品****石棒類 (296～298)**

3点を掲載した。296は大型石棒で、頭部を作出している。298は未成品で、両面に敲打による整形痕を持つ。製作途中に欠損した可能性がある。いずれも縄文時代晩期か。

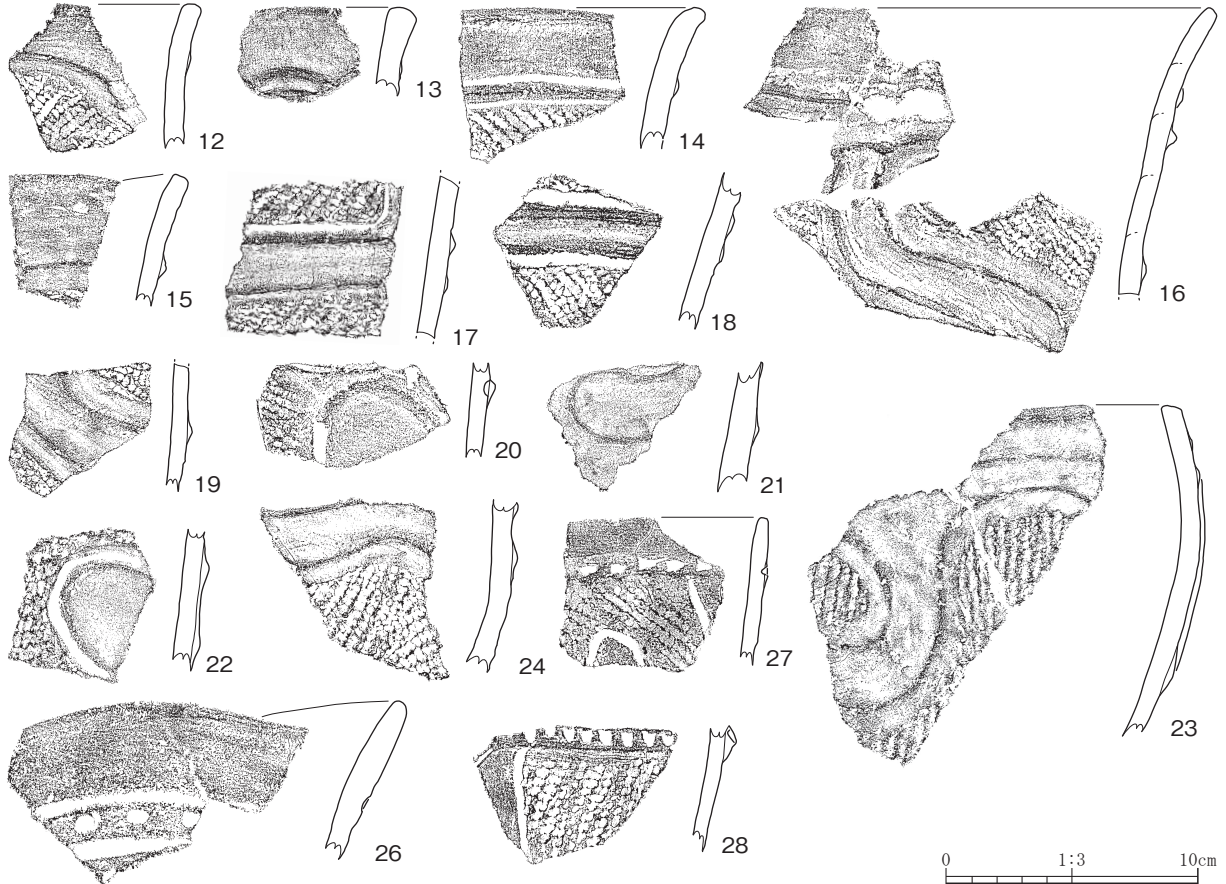
I 群 A 類 縄文時代中期後葉 (1~3)



I 群 B 類 縄文時代中期末葉 (4~11)

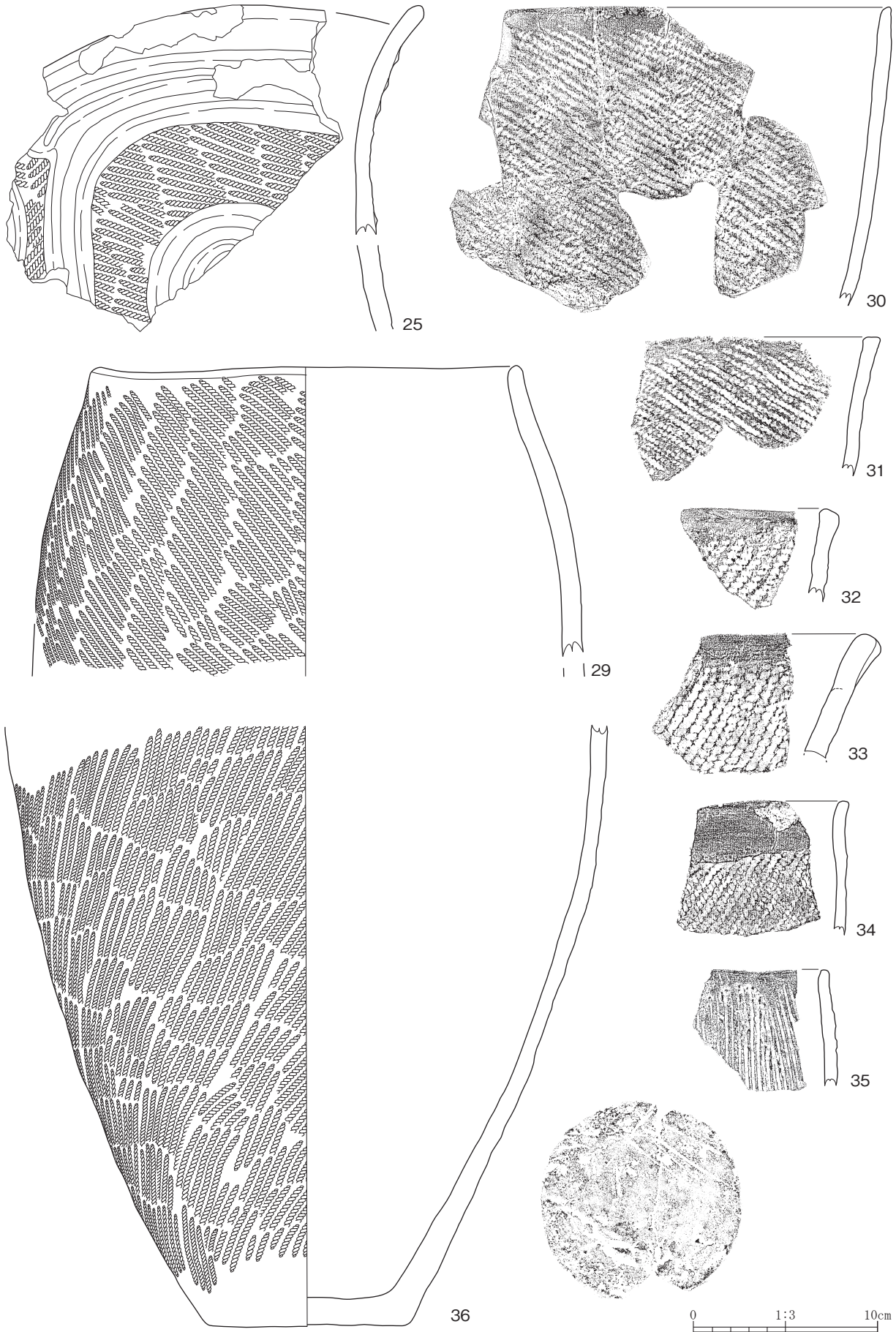


I 群 C 類 縄文時代中期末葉 (12~37)

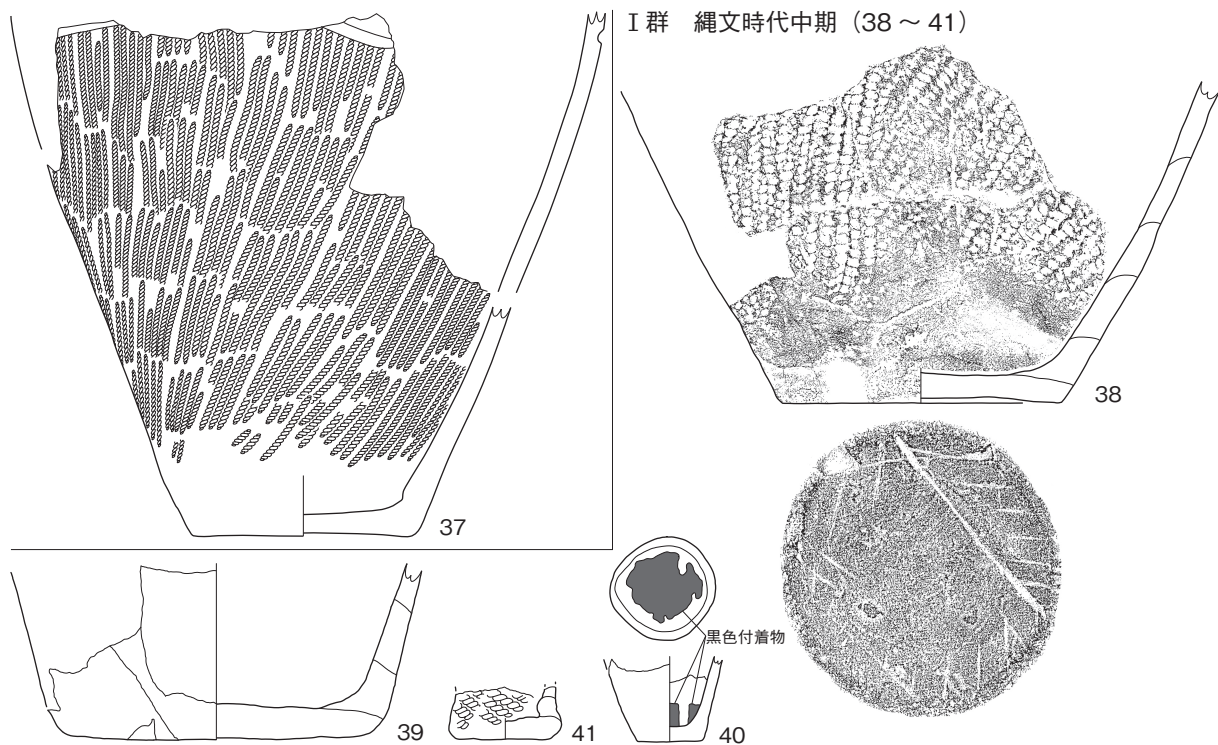


第9図 土器 (1)

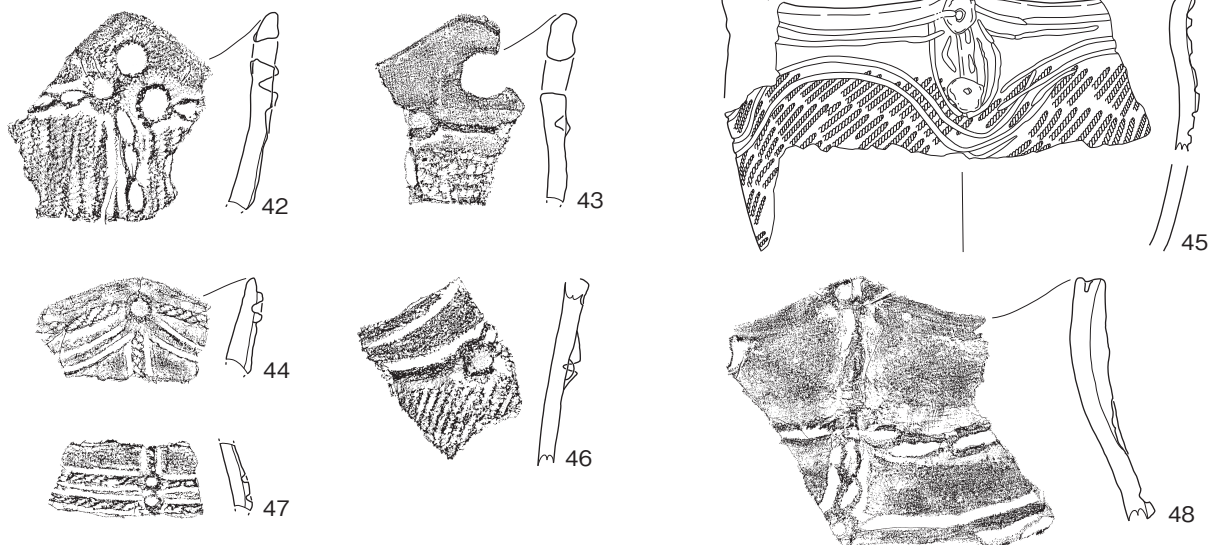




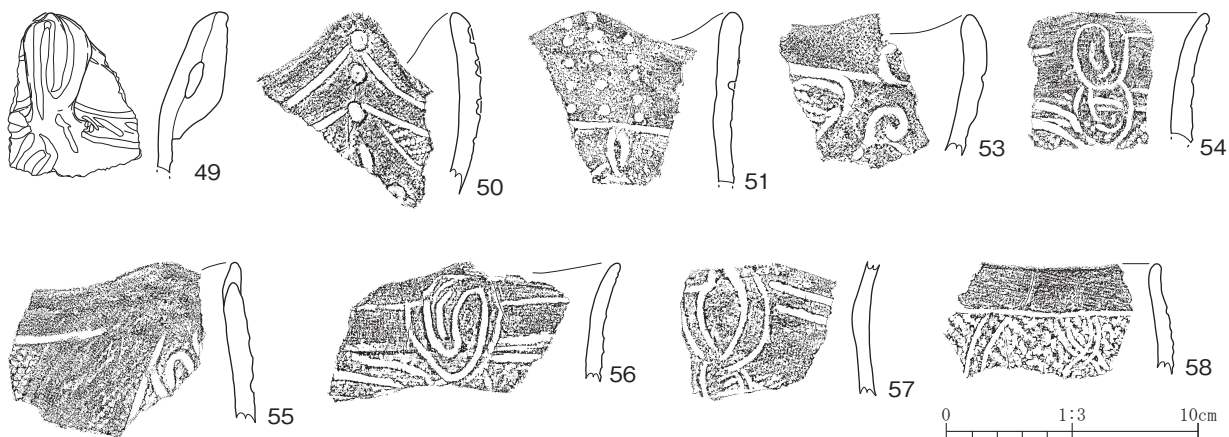
第10図 土器(2)



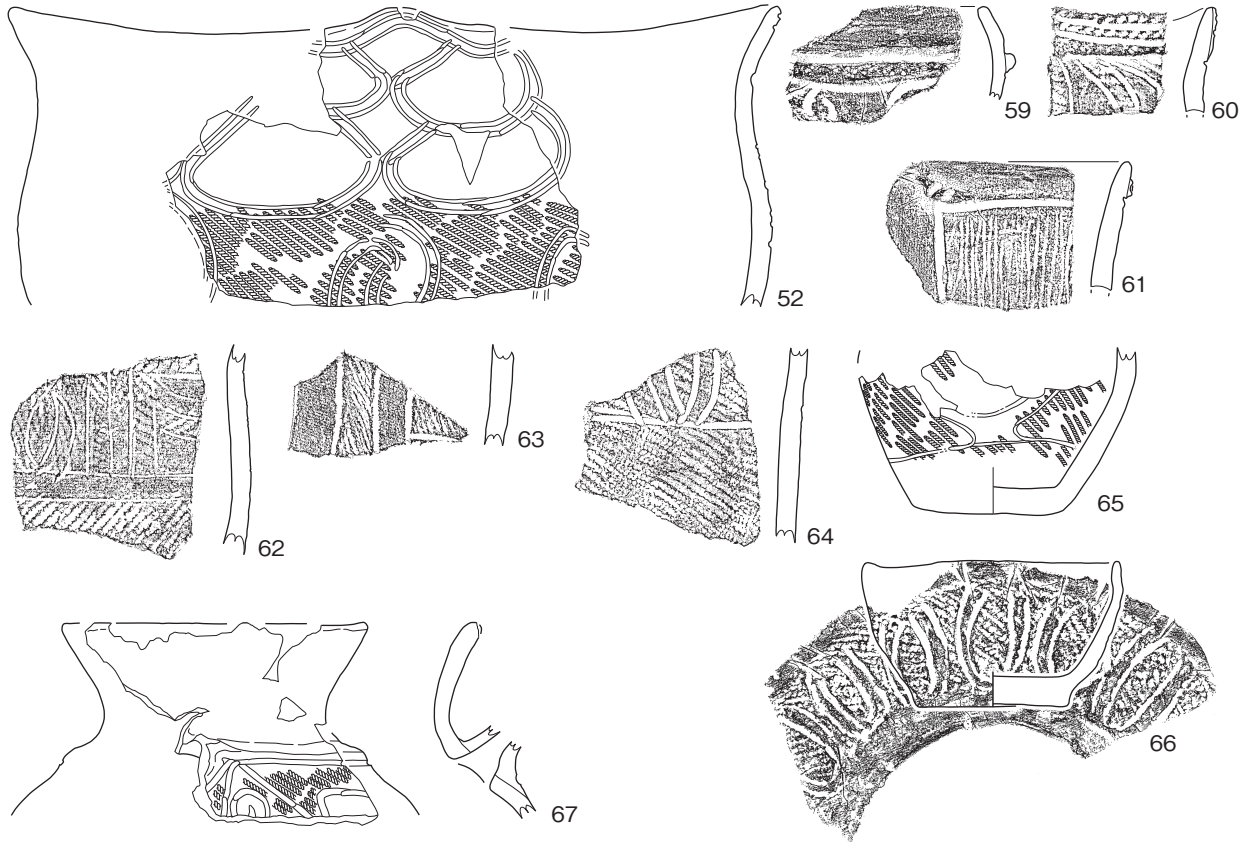
II 群 A 類 縄文時代後期初頭 (42 ~ 48)



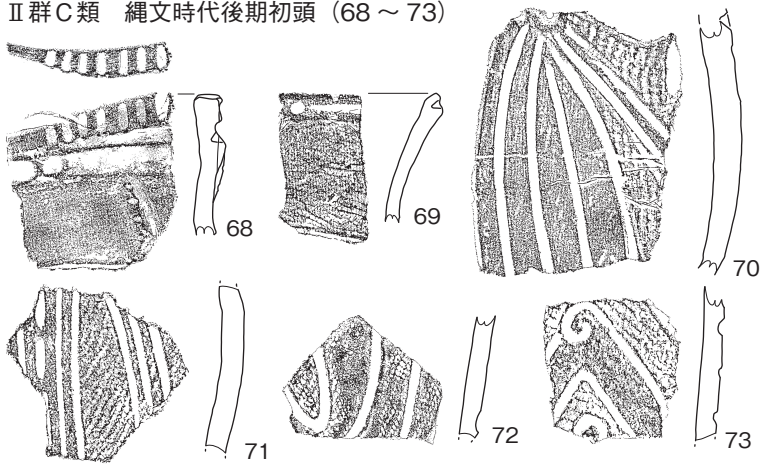
II 群 B 類 縄文時代後期初頭 (49 ~ 67)



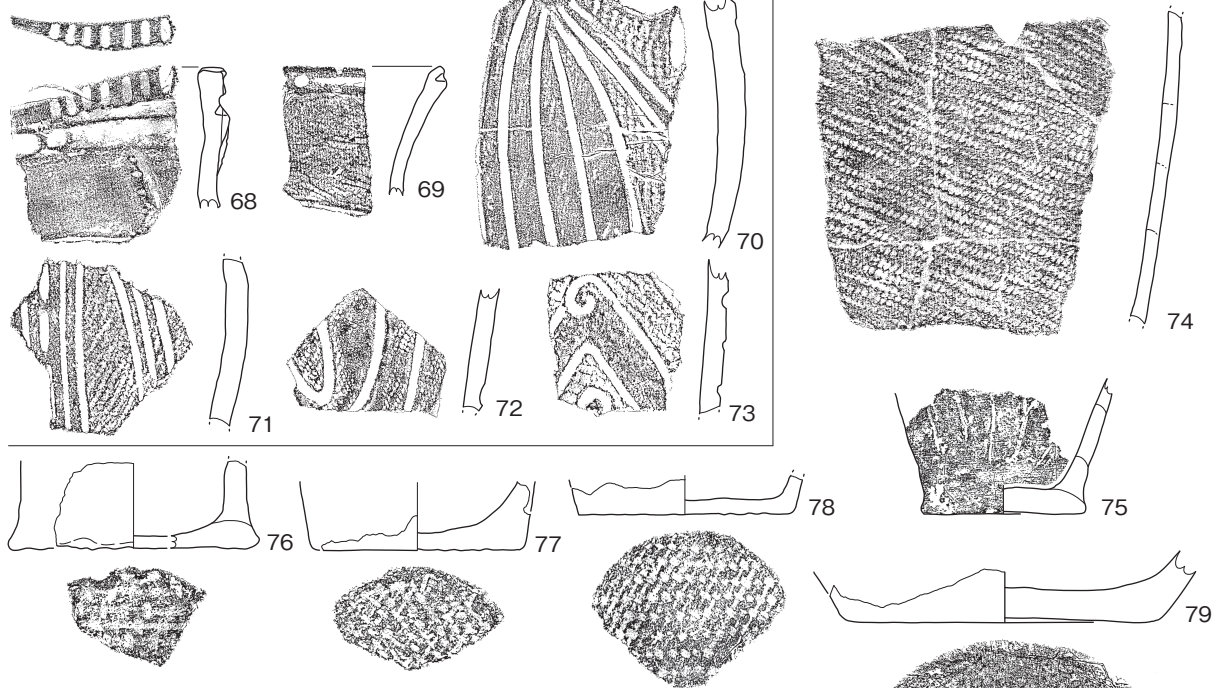
第11図 土器 (3)



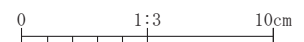
II群C類 縄文時代後期初頭 (68 ~ 73)



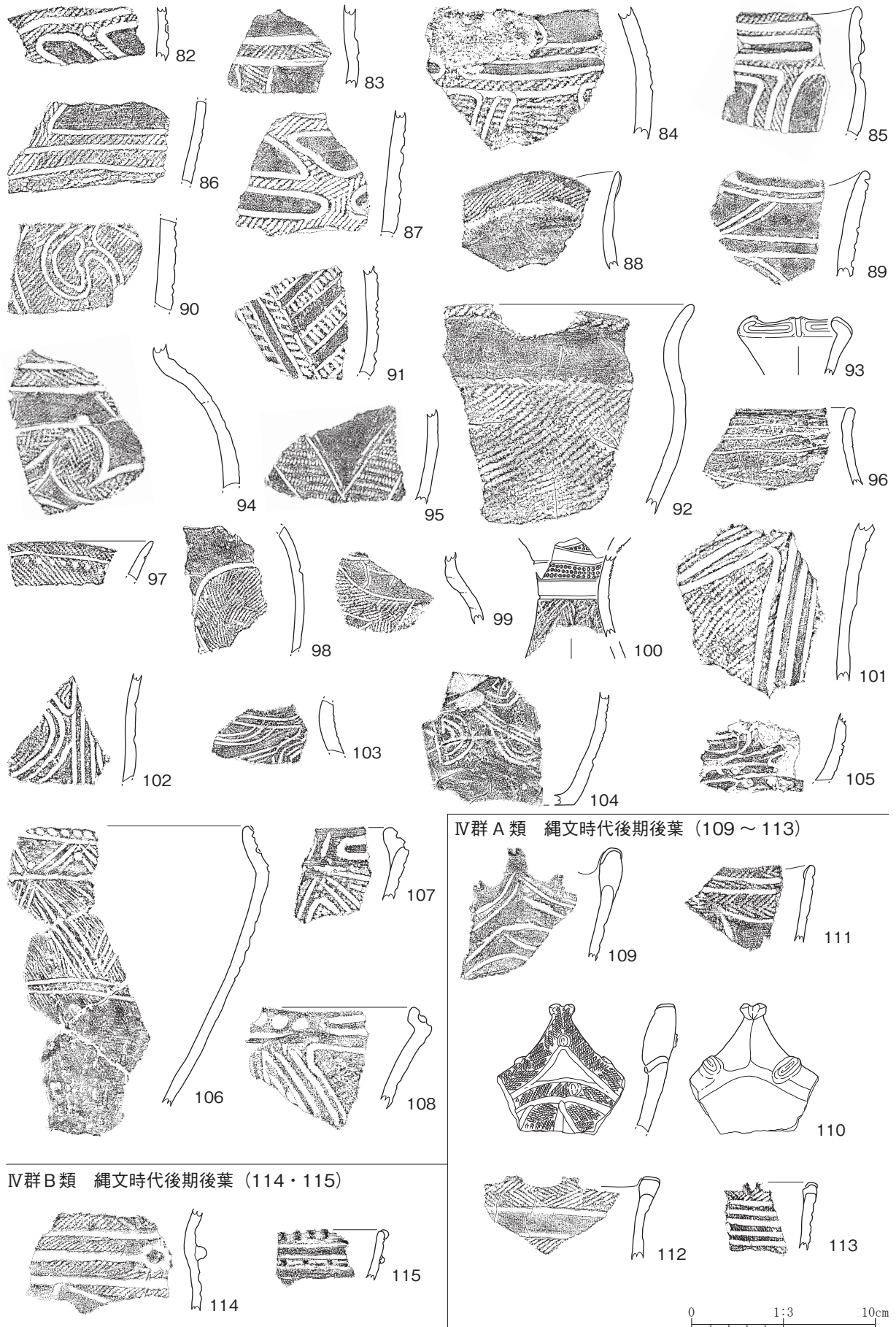
II群A類か 縄文時代後期初頭 (74 ~ 79)



III群 縄文時代後期前葉後半~中葉 (80 ~ 108)

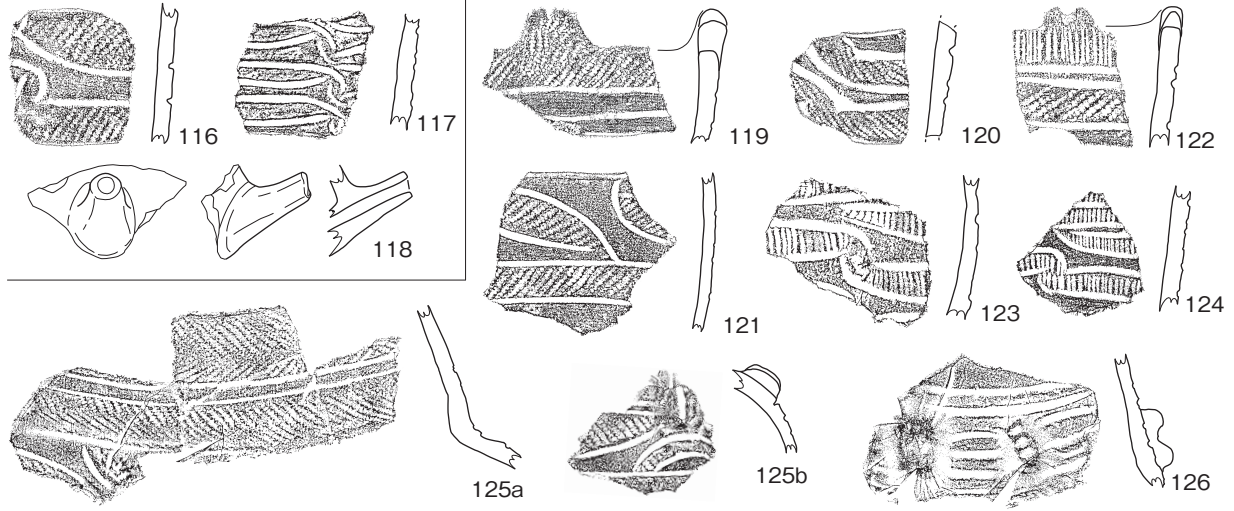


第12図 土器(4)

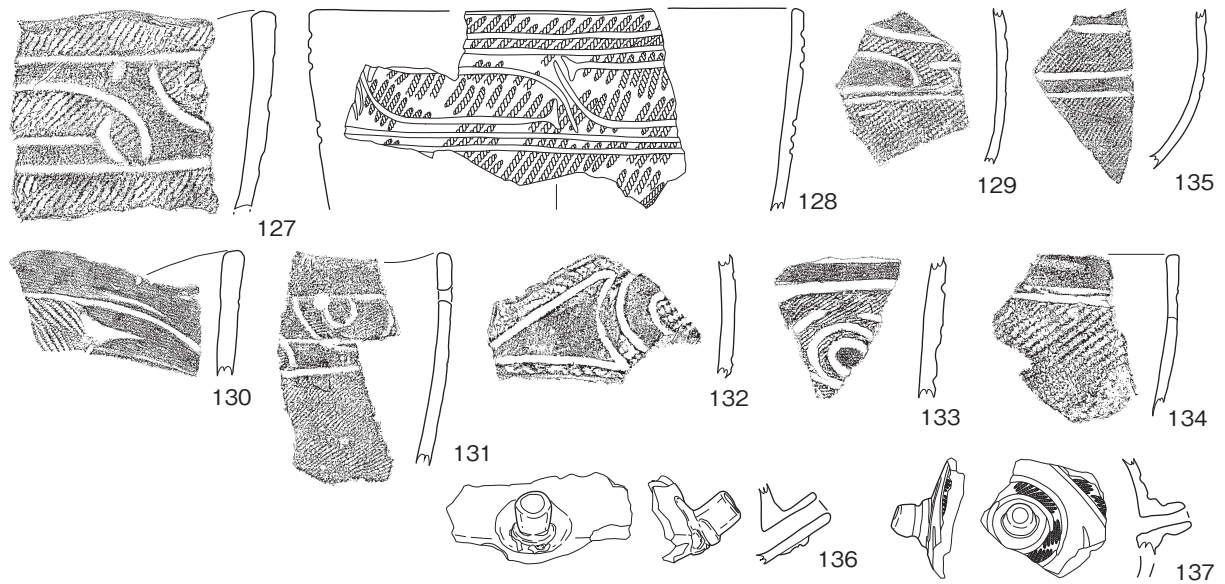


第13図 土器 (5)

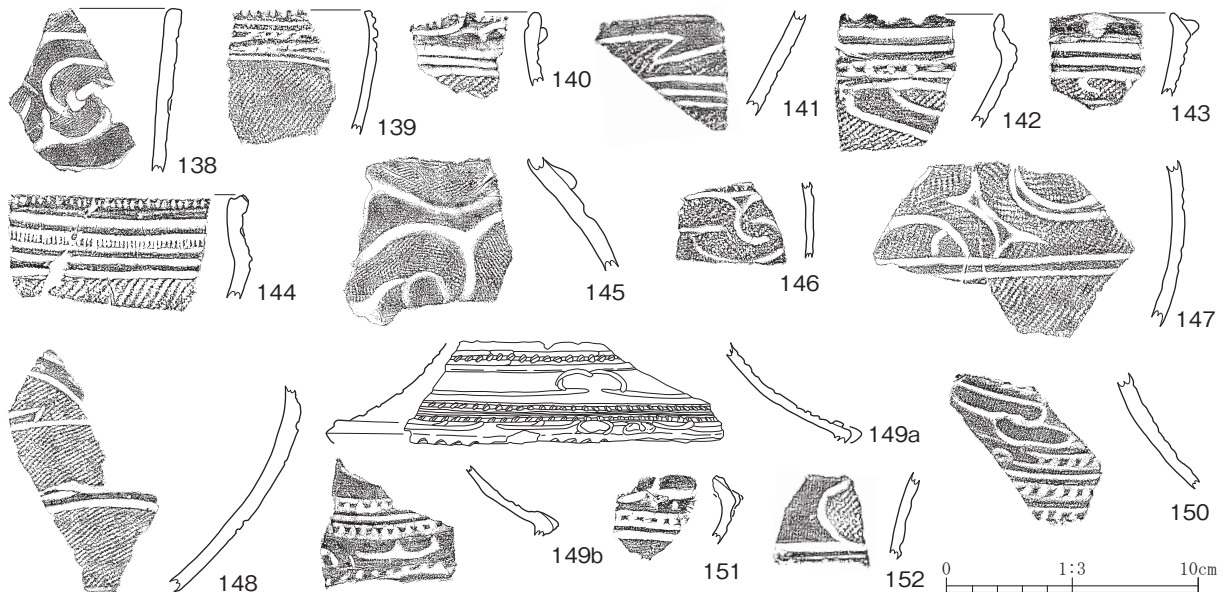
IV群C類 縄文時代後期後葉 (116 ~ 118) IV群D類 縄文時代後期末葉 (119 ~ 126)



V群A類 縄文時代晩期初頭 (127 ~ 137)



V群B類 縄文時代晩期中葉 (138 ~ 152)



第14図 土器(6)